
バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

ト部祐一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

【Nコード】

N0680X

【作者名】

ト部祐一郎

【あらすじ】

《イクリプス》。かつて地球人口の三分の一を消滅させた悪夢。悪夢から背を向けた人類が向かったのは宇宙だった。新しい世界、コロニーへと居を移して。しかし、そこに待っていたのは決して希望などではなく……。学園スペースオペラ、ここに開幕。

(HPと並行して隔週で連載中。URL: <http://amatereasu.buzama.com/syou/bulletblue/rb|title.html> 更新はHPの方が早いかも?)
タイトルに、サブタイトルを追加しました。

登場人物紹介

・九桐斎 くどういっき

主人公。目つき悪っ！でも中身は割と常識人。色々と秘密がありそうだったりそうでもなかったり。

二学年から転入してくる。良い意味でも悪い意味でもなぜか目立つ。割とシャイ(?)。

格闘から狙撃までこなすオールラウンダーで、機体操作技術は未知数。

なぜか妙にモテるが、本人にはまったく自覚がない。

・クリステイーナ・キルヒアイゼン

斎と同居する金髪碧眼の美少女。「デキる女」で、恐らく本作中一番の常識人。そして苦勞人。

赤くなったり青くなったり叫んだり、色々忙しい割に実は出番が結構少ない。

とある『仕事』をしているのだが……。

・細峰結莉 さいみね ゆいり

三年の風紀委員。実は最初は風紀委員長だったのだが、設定の変更で格下げになった。苦勞人。

自信満々な割に浮き沈みが激しい性格。男まさりで、本作中で恐らく一番カッコイイ。でもBカップ。

実は、名前が七転八倒に変わりまくったという秘話を持つ。

主な搭乗機体は加茂富技研のKKD1 紫電。近接距離兵装にカスタマイズを施している。

・四方院楓 しほういん かえで

いいところのお嬢様 + 成績トップ + 人当たりがいい + 生徒会長、とい

うまさにミス・パーフェクト。

大人に見えて、結構子供っぽいところがある。友達思い。

典型的な生徒会長タイプ。男女問わず大人気。まさにアイドル。

主な搭乗機体は平澤重工のS I 1 桜華。一般的な中距離兵装だが、搭乗者の技術が半端ない。

・アンジェリカ・ロス

正鳳学院二年、主人公のクラスメイト。赤髪の美少女。

序盤で主人公に助けられ、以降助言役として登場。恐らく登場回数最多賞は彼女である。

強気な性格だが、別にツンデレではない。若干ややこしい性格。なんかクリスと被るし（作者談）。

ザ・天才と言える少女。格闘から銃撃、運動から操作技術全般、全てがトップレベル。

かがみ ゆきな
・各務雪奈

二年、主人公のクラスメイト。大人しい印象の黒髪少女。所謂ヤマトナデシコ。場合により眼鏡。

アンジーとは大の仲良しで、なんでもそれまでは友達がいなかったらしい。

アンジー以外と話す時は大体敬語。さらっと毒舌を言うこともある（悪気なし）。

くろせ いちろう
・黒瀬晃一郎

二年、主人公のクラスメイト。悪友であり、そして馬鹿である（断言）。

恐らくドラグーンへの情熱だけは誰にも負けない。得意授業は体育です。

非常に背が高い。多分作中で一番高い。しかしそれだけである（酷え）

・宮部蒼嘉 みやへ そうか

二年、主人公のクラスメイト。チビ、可愛い、甘えん坊、そして同人誌の恰好の的。

常に隼人と一緒に行動する。主人公が転校してからは主人公にもなぜか妙に懐く。

いわゆる子犬みたいな少年である。

・佳美隼人 よしみ はやと

二年、主人公のクラスメイト。美形だが常に無口、そして無表情。基本的には蒼とセットで、単独でいることはなかなかない。

何事もそつなくこなす。しかし表情は変えない。ただの天然ボケという説もある。

・一条南 いちじょう みなみ

ザ・クールビューティー。生徒会副会長、そしてブレインである。すらっとした美人で、そして眼鏡である。毒舌かつ冷たい。でもちよっと動揺に弱い。

彼女はDSなのか隠れMなのか、という議題で生徒会が揺れたことがあるらしい。

・春寺嵩 はるでら たか

ナンパ男。チャライ。茶髪。でも通称は『不動の春寺』だったりする。ただのサボリという説も。

生徒会執行部部长。結莉にとっては一応上司みたいなものだが、誰も気にしたことはない。

いっつも副会長に刀で脅されている。だが本人はそれを楽しんでいるという説もある。

・鹿堂聖 しかどう せい

通称、スーパーメイドひじりん。なぜかいつもメイド服。そしてなぜかいつも日本刀を携帯している。

生徒会執行部副部長。彼女をして出来ないことはないと言われる超メイド。

慇懃無礼と毒舌を足して2で割ったような性格。黙っていれば完璧である。

・東郷龍平
とうきょう たつひら

生徒会調停部部长。なのだが本当は諜報部とか似合いそうな人。通称スーパー忍者。

どこからともなく現れて、どこへともなく消えて行く。そんな感じの人。文脈の中で唐突に現れるので、実はとっても書きにくい。

怖い気がするけど、実は何気なく気が効く良い人。空気王（空気読める的な意味で）。

・三枝鈴音
さえぐさ りんね

名前だけ出て登場場面はまったくない、むしろ出てこない、可哀想な人。二章で頑張れ。

生徒会調停部副部長。蒼とコウを足して2で割り、さらに女にしたらこんな感じになる。

馬鹿+能天気+KY。そしていつも無駄に元気いっぱいフルパワーである。出番は無いがな！

・雪宮忍
ゆきみや しのぶ

工学科でメンテナンス長を務める天才。電子委員会委員長、さらにメンテナンス部の部長を兼任する。

その腕は第一線級で、結莉や楓も彼女を信頼している。所謂ドラゴン馬鹿だが、話し方はぞんざい。

なんだか色々パロディが詰まっていたりする人。

・城里啓一 しるせと けいち

結莉に喧嘩を売った二年生。

・各務紗枝 かがみ さえ

主人公の担任。出番は基本的でない。しかしどうでもよさそうな人。
さえちゃん先生。

登場人物紹介（後書き）

なんだかまだ登場してない人も載ってたりするよ！
でも気にしないでね！

人型兵器 概説

・ドラグーン・アサルトとは？ Armored Assault Type-Dragon
ドラグーンとは、汎用宇宙兵器群 アーマード・アサルト の一種であり、その中でも特に、現代最強と称される人型兵器群の総称である。

全高はおよそ6m〜7m程度が主流で、両腕にマニピュレーターを装備し、ソフトウェア高分子人工筋肉による柔軟かつ高い運動性を保有する。重量はおよそ10t（非装備時）〜20t（限界重量）程度、動力源はEC機関。

地上にあっても高い運動性能を発揮するが、その性能は飛行時、及び宇宙空間領域において真価を発揮する。

ドラグーンは全身の各所に、6個〜20個にも及ぶ大量のスラストを設置されており、それを同時、及び連続的に使用することで圧倒的な機動性を発揮する。

その加速力は1000m/s²（10G）以上にも及び、高性能な重量軽減装置や、装着するパイロットスーツによって大きく軽減されなければ、この兵器を扱うことは到底不可能である。

また、それを連続的・同時に用いるほどの膨大な出力は、EC機関でなければ獲得不可能であり、そして同時に、EC機関はドラグーン以外……即ち人型兵器以外に搭載できないという欠陥を持つ。

・ADOS / Armored Dragons Operating System
エイドスADOSとは、ドラグーン機の機体管制に使用される戦術管制システムのこと。

それぞれのドラグーンにインストールされており、戦術データリンクや各種火器管制、AIや操縦系統（CASTシステム）を内包す

る。

一般に、各企業や国家が開発した様々なADOSが存在し、月面連
合の諸国家が使用する主なADOSはD-CAOSケイオス管制システムで
ある。

また、現在のCASTシステムに代表されるような、神経補助操作
系統(S・B・M・I)にかわる新たなB・M・I操作系統の開発
は、現在のADOS関連開発におけるもっとも先進的、かつ注目を
集める分野である。

・ D-CAOS / Dragoon - Control As
salut Operating System

D-CAOSケイオスとは、エイドスの一種で、月面のクルス科研により開
発されたもの。もっとも有名、かつ一般的とされるADOS。

主に、日本、G・Uを始めとしたL1、L2各国で使用されている。
現在の最新バージョンは【CC-ADOS-5/D-CAOS 2
10】である。

人型兵器 概説（後書き）

携帯より。変なところがあればご指摘ください。

プロローグ

鋼鉄が疾駆する。

強化合金によって作られた銀色の壁柱が、瞬きほどの速さで後方へと流れていく。

その数、四。

それはまさしく、流星であった。緋と銀の色で彩られた、一筋の流星。それが宇宙という漆黒を、美しく、しかし暴力的なまでの速度で滑り落ちて行く。

それが本物の、鉄の流星であったならば、違いなく人類にとっての脅威であった。

しかしそうではない。もし速度を度外視したとしたら　はつきりと見えたはずだ。

その鋼鉄が、人型であることに。

しかしたとえそれが流星ではないとしても、脅威という意味では、同じかもしれない。

それは機械である。それは兵器である。

容赦もなく人を踏みつぶし、銃弾をばら撒き、全てを無意味な残骸に変える。四メートル級の鉄の巨人は、間違いなく、ヒトに対する脅威であるに違いないのだ。

流星の如き残影は、軌道エレベーターの内側を、影から影へと駆けて行く。

『 目標地点まで、残り六秒です』

(目標?)

スピーカーから流れる声に、はっとした。

……不意に、脳裏に冷たい電撃が走る。

(え?)

自分はいつたい、何をしているのか？　ここはどこだ？

目標とは何なのか。そして自分の駆る、この機械は何なのか。

不意に、分からなかった。

『目標地点まで残り三秒です。減速してください。警告です、減速してください』

突然のアラームと共に、眼前の画面に赤い警告画面がポップした。スピーカーから流れる女性の人工音声、警告を告げている。

(減速……！？)

わけがわからないまま、手元にあるレバーを後ろに倒した。

がくんつ、と機体が大きく揺れる。それと同時に、先ほどまでにあつた重く苦しい重圧が遠のいていく。だが……それだけで済んだわけでもなかった。

同時に、まるで振り回されるように、コックピットが二転三転する。錐揉状態で落下しているのだと、不意に気づいた。

『姿勢^{AC}制御、十パーセントに減衰。警告、アティテュードコントロール、システムでは回復できません』

脳裏に幾重もの警鐘が鳴り響き、未だにまったくの状況がつかめないまま、両手がシートの左右に四本配置されたスティックへと伸びる。

そこから先、どうやったのかは、自分でもよく分からなかった。

ただがむしゃらにスティックを操作し、どうにか回転を止め、姿勢を安定させる。同時、かつてシステムが警告した三秒間が経過し、軌道エレベーターの壁面を、足の裏(といっても機械の、だが)で火花を散らして削り取りながら静止する。

「はあ……はあ……」

『アティテュード、クリア。機体制御、回復。速度の停止を確認。作戦目標地点に到達しました』

(なんだってんだ……！)

毒づく。しかし急激に圧迫から解放された肺が、言葉を放つことすら許さない。早鐘のように脈打つ心臓は、痛いほどに呼吸を圧迫

していた。

状況が分からない上に、この有り様である。当然ながら、頭の中は混乱の極みにあった。

そんな彼が、毒づく以外に、意味のある行動を起こせたのは……
眼前の光景が、あまりにも美しかったからである。

息を呑む。

そこには 地球という名の、惑星^{ほし}が、あった。

地球、という名の惑星^{ほし}がある。

太陽系に属し、海があり、空気があり、生命とがあった。そういう惑星である。

しかし、たったそれだけで、語る言葉が終わるはずがないのだ。

我らの……母なるこの星が。

太陽系第三惑星、人の故郷。……言葉を重ねたところで、そこには本当の真実はない。

地球は我らが故郷にして、今や帰れることのない死の大地なのである。

破綻は、ある日突然に訪れた。

千死病。片隅で生まれたその病は、しかし二百七十四日という短さで、世界を席卷した。

それはまさしく災厄であった。あらゆる対策手段が生まれ、その悉くが水泡に帰し。ついに、虐殺という名の隔離政策さえもが無駄だと悟った人類は その頃ようやく現実化した、宇宙移民政策に縋りついた。

……そしてその時既に、人類は、三分の一以下という悪夢のような数へと減じていた。

イクリプス。

その悪夢は、そう呼ばれた。

人は、地球を捨てた。

これは比喩ではない。事実、人々は、自らを殺し尽くさんとする悪夢から逃げ出し、そして生き延びた。これは何も驚くことではないし、不自然なことでも、責められるべきことでもない。

生きようと欲する意思こそが、命が命として在る源泉である。そういう意味で、彼らは英断した。

人は 宇宙に救いを求め、そして救われたのだ。

しかし、救われなかった者もいた。

宇宙を眼の前にして、病に倒れたものがいた。

狂気と恐怖に唆された人々による、戦争と言う名の殺戮もあった。

自ら地球に残り、悪夢と戦うことを選んだ人々もいた。

かくして時は流れ。

世界も、悲劇も、止まることはなく。

そして 二百年と言う、長い月日が流れ去った。

斯くして物語は紡がれ始める。

それは宇宙での物語。コロニーと呼ばれる新たな世界で、人々は歩み始める。

その先にあるものが、希望であるのか、絶望であるのか、それすらも分からないまま。

プロローグ（後書き）

はじめまして、kazaisyuと申します。この度は拙作を閲覧頂き、誠にありがとうございます。隔週にて定期連載予定となっております。

第一話 いつもの朝に

最初に見たものは、見慣れた白い天井だった。

最初に聞こえたのは、耳慣れた時計の音だった。

何の変哲もない、いつもどおりの部屋だった。そこにあるのは静寂と、静寂に紛れるわずかな息遣い。

部屋の中には、二人の人間がいた。要約すれば、自分と、誰かだ。
「……………」

睡眠からの覚醒。身体状態を確認 異常なし。危険がないらしいことは、すぐに分かった。自分でない誰か……要約すれば侵入者は、寝息を立てていたからだ。

この時、彼は既に気づいていた。何が起きているのか。侵入者は、誰なのか。

ベッドの上で、天井を見つめていた目線を、ベッドの上へ下ろす。そこには……スヤスヤと寝息を立てる、金髪の少女の姿があった。自分の胸の上に頬を押し付けて、しかも割と幸せそうな顔で。

再び天井を見る。

……状況だけ見れば、恋人か夫婦が情熱的な夜を過ごした、その朝だ。

だが、二人がそんな関係であるわけもなく 当然、そんな事実がないのも自分が誰よりもわかつている。昨夜ベッドに入り、就寝するまでの間、確実に一人だった。

となれば、結論はひとつしかない。

こめかみを押さえながら といつても、両手を少女に封鎖されてしまっているわけだが 溜め息を吐く。

こういふ場合の対処方法は、既に確立されつつあった。

とりあえず、息を吸い込む。そして

「キルヒアイゼン上等兵！ 何を寝ている、さっさと起きろ！」

怒鳴りつける声に、はうあつ、と眼を見開いたかと思うと、金髪を翻す暇もないほどに迅速に、ベッドから降りて敬礼した。

そして、今度はぱちくりと眼を瞬くと、こちらの顔を認めたのか、あ、という顔をした。

その少女の姿は、一言でいえば、可憐だった。すらりと伸びた手足の細さは、『華奢』といって相違ない。さらさらと光るような金色の長い髪、瞳は美しいスカイブルーを写し取ったかのような蒼。

その造形は、男が見れば十中八九見とれてしまうに違いないほどの、金髪碧眼の美少女だ。こんな美少女に朝から抱きつかれていたと思えば、鬱陶しい気持ちもどこかにいってしまふ。それも事実である。

ゆえに、彼 九桐斎くとうさいは、いたって平静に、優しく朝の挨拶をした。

「……おはよう」
とりあえず挨拶をすると、「あわ、あわわわ」と慌てふためき始める。

普段の（それなりに）凛々しい姿を見ていると、どこか笑いを誘う光景ではある……のだが、今笑えば彼女の自我を崩壊させる契機になりかねないので自粛した。

「お、おはようございます、ちゅ その、斎さいさん」

「ああ、おはよう、クリス。とりあえず、俺のベッドで寝てた理由について聞かせてもらえるか？」

いや、その、と口を変えながら金魚のようにぱくぱく口を開閉する少女。白磁のような頬が真っ赤に染まっている。

そして唐突に、「失礼しましたーっ！」とダッシュで逃げ去っていった。

これもまた、見慣れた光景と言えそうである。

（どうせ、また酒でも飲み過ぎたんだろ……）

クリステイーナ・キルヒアイゼン。それが少女の名前だ。故あって今は共に暮らしているが、別に血縁関係があるとか、そういうわけではない。

もちろん恋人でもなければ夫婦でもない。

言ってしまうばただの同居人で、書類の上でももちろんただの他人だ。敢えて形容するならば……保護者、といったところだろうか。実を言えば、『もうひとつの』名前を聞けば誰もが驚く類の有名な人でもあるのだが、彼女がその話を嫌がるので、ここではやめておきたい。

ちなみに、見た目からはまだ十代の少女にしか見えないが、実は二十歳を超えている。

成人であるがゆえ、酒を飲む分には法律的にも問題ない……のだが、彼女が酒を飲み過ぎて酔い潰れ、拳句人のベッドで寝る、という悪癖が割とよくあるのも確かだ。人が眠っているベッドにもぐりこむ、というのも少なくない。

(弱い癖に飲みすぎるのが悪い……)

駄目人間、というような類の少女ではない。むしろ規則正しい生活を送っている方だ。

ただ、朝も夜も問わずに怒涛のように襲いかかる類の仕事は、彼女の中にもどうしてもストレスを蓄積させてしまうのだろう。

とはいえ、ストレスのはけ口を酒ばかりに求めているは、体によくない。そろそろ何かひとつ趣味にでも目覚めて、新しいストレス発散方法を彼女も編み出すべきだろう。

うんうん、と頷きながら彼女が秘蔵している酒類の類を、今度どこかにひっそりと隠しておいてやろうと思った齋である。

無論、彼女が知れば泣いて止めるだろうが、それで全てが片付くほど人生は甘くない。今のうちに、そういうことを叩きこんでいた方が彼女の為だ。きつとそうに違いない。

密かな決意を固める齋のことを、朝ごはんを支度すべく台所で駆

けまわるクリスを知る術は、無論なかった。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまです」

クリスの作った朝食（ちなみに斎の希望で今日は和食だ）に下鼓を打った後、残った食器を重ね、台所まで持って行く。

それに倣ったクリスに、斎は片手を振った。

「ああ、置いといてくれ。片づけておくから」

「あ、すみません」

敬語でクリスが返す。下ろしていた髪は、今はポニーテールにまとめられている。今朝の無防備な雰囲気とは違い、もういつものしつかりとした雰囲気が変わっていた。

なお、家事は分担だと最初に決めているので、斎としてはごく当たり前のことでしかない。

ちなみにだが、彼女の方が年上であるので、当然ながら敬語は本来必要ない。が、忠告するたびに「好きでやっていることです」と返され、苦笑はしても止めてはくれないのだ。

とはいえ、彼女との付き合いも長い。もう慣れたが、若干むずがゆい時もある。

ちなみに最初はと言うと、むず痒いどころか勘弁してほしいと思っただものだ。そう思えば、なるほど、人間は成長する生き物だと実感する。

「そういえば斎さん、今日は入学式ですよね」

「ああ」

四月一日。春の訪れるこの季節は、ここ日本ではごく当たり前に入学式の季節である。

当然齋も、その準備は昨日のうちに済ませてあるので、クリスの手を煩わせるところはない。疑問に思いながら、素直に頷いた。

「その入学式って、私も……その、行っていいんでしょっか？」

ん？ と眼をやると、彼女の頬は若干朱に染まっていた。

当然ながら、入学式にも父兄の参加枠というのはある。確かに、説明会の時に、もらった書類の隅に書いてあった記憶があった。彼女の仕事についても、今日は休みだと聞いている。ただ……

「……目立つからな、君は。俺の知り合いだとバレたら、少し面倒だ」

「だ、大丈夫です！ 潜入任務も経験があります！」

「そういう問題ではないんだが……」

ただ、彼女の名前は嫌というほど知られているが、顔は実のところあまり知られていない。その理由と言えば、何せ、本人が写真を撮られるのを嫌がるからだ。

何でも、写真は嫌いなのだと言っていたことを聞いたことがある。

(……フム)

皿を無意識的に洗いながら思索する。その間も、彼女はずっとこちらを見つめていた。

「……まあ、別にいいか」

「い、いいんですかっ!？」

飛び上がるように あるいは飛びつくかのように ぱっと彼女は顔を輝かせる。

何がそんなに楽しいのか分からないが、まあ、別にバレないだろう。万が一バレたとしても、自分の知り合いだということは彼女も明かすまい。

第一、彼女は既に何度か買い出しで外に出ている。それでもバレていないのだから、それほど難しい話でもないはずだ。

「ただ、ある程度の変装はしてきてくれ。帽子を被るぐらいでもい

い。バレないに越したことはないからな」

「了解です！」

それを聞くや否や、彼女はダッシュで部屋に駆け込んだ。苦笑しつつその背中を見送る。

(まったく……思い立ったら速いな)

いつもそうだ。いつでも全力。そんな彼女だからこそ、少しばかりのわがままなら聞いてやりたくもなる。

……ただ、この時の彼は、若干見通しが甘かった。

それを彼が認めざるを得なくなるのは、あと三十分は先の話なのだが。

塞翁が馬、という諺がある。

幸運が転じて不幸となり、不幸が転じて幸運となる。

そういった意味合いであるが、当然、そうでないことの方が圧倒的に多い。不幸は所詮、不幸以上の何ものでもないし、幸運は所詮幸運であって、必然ではない。よって、何の気もなしに不意に起こるし、そしてその偶然が、或る一人の人生すらも壊してしまうことだってある。

不幸にせよ、幸運にせよ、それは同じことだ。

よってこの時、九桐斎の身に起きた不幸が、後々になって取り戻せるとは断言できないのである。そして断言しよう。彼女の身に起きた事件は、あくまでも事故であって、故意ではない。断じてない。……さて、では言い訳をしよう。

食器を洗え、まずランニングに向かった。日課である。約12kmの距離を走り終えたとき、既に三十分は経過していた。

そして学校へ行く準備を整える。服を着替え、鞆の中のタブレットPCを確認し、部屋を出る。

さて、それじゃあ時間もあるし、クリスに準備が出来たか声をかけてみるか、ということ唐突に思い付き……そして、それが悪かったのだろっ。

トントン、と部屋のドアをノックし、そのままドアノブを握る。

「準備は出来た……か……」

言いながら、がちやり、とひねった。言葉の最後が消えかかっていったのは、その先にあった光景に、思わず絶句したからである。

そこには、ズボンを脱ぎかけた状態のまま硬直した、金髪の少女が居た。

上に着る白い服ははだけられ、彼女の前に設置された鏡からは、形のいい胸と純白のブラとが覗いている。そして眼前には、同じく白のパンツに包まれた彼女のお尻。

彼女のスタイルの良さと肌の白さに改めて驚かされながらも。この段階で、既にもうどうしようもない窮地に立たされてしまったのだと、九桐斎は理解した。

そして起こせるアクションは、彼の場合たった一つ。

「……失礼した」

がちやり、と扉を閉めて外に出る。

『%っ!?!?#@ っ!?!?』

扉の中から、言葉にもならないような悲鳴が轟いた。

「……すみません……」

それから十分後。斎による誠心誠意をこめた（扉の向こうからの）謝罪によろやく折れたのか、がちやりと彼女はドアを開けた。

おずおずと頭を下げたその顔には、申し訳なさと恥ずかしさが半分半分くらいで映っていた。未だ頬を若干赤く染めつつも、こちらに視線を合わせようとはしない。

「お待たせしてしまった拳句、お見苦しいものを……」

「いや、お見苦しくはない。クリスは綺麗だからな」
言ったとたん、「はうあ」とクリスはまたもや頬を染めた。褒め言葉に弱いことは普段の経験から分かり切っている。こ誤魔化されるのは彼女としては本意ではないだろうが、無論、彼女が綺麗だと思うのも真実であるから問題ない。

……ともあれ、そんなこんなで。ようやく、彼らはそうして家を出た。

登校路を並んで歩きだす。

お互いの服装としては、斎は無論だがただの制服で、対して四五分という長い着替え時間を使ったクリスは、白のワンピースに錨広の帽子……いわゆるサハリハット、という出で立ちであった。

こちらの視線に気づいたのか、クリスは少しだけ目をそらすと、ためらうように、言った。

「……その、似合ってますか？」

「ああ、とても」

お世辞ではなかった。クリスもそれを理解したのか、ぱっと花のような笑顔で嬉しそうに微笑んだ。

それに、とクリスは言った。

「髪も下ろしてますし、帽子で隠してますから、まずバレないと思います」

「そうだな」

確かに、いつものポニーテールが、今はロングヘアに変わっていた。美しい金の髪が、さらりと風に揺れる。

なるほど。目の前にこうしている彼女は、普通の少女だ。多少、というか、過分な脚色をせずとも十分すぎるほどの美人ではあるが、それだけだ。

斎の言葉を皮きりに、二人の間に満ちたのは、朝の静謐さを含ませた沈黙だった。

しかし不快ではない。それはお互いにだったのだろう。二人の歩く速度に、淀みはない。

「……学校かあ」

彼女が口を開いたのは、五分かけて歩き、ターミナルのゲートについた時のことだった。

ゲートで指紋とパスを認証し、構内に入る。ターミナルは、コロニー全体を縦横無尽に走る輸送エレベーター……通称『クレードル』へと繋がる。エレベーターといっても個室式で、最大で時速は300 kmにも及ぶ代物だ。

しかし、今この『クレードル』は、やや斜め下方向に向かって、時速50 km程度の緩やかな速度で輸送路を滑っていた。だが、たとえ300 kmの速度を越えても、その振動や苦痛といったものはまったく内部には伝わってこなかっただろう。アーマードにも応用される重圧軽減装置のおかげだ。『揺り籠キャンセラー』の名はここに由来する。

斎は、クリスの言葉に何も返さなかった。

返さなかった、というより、返せなかった……といったほうが正しいだろうか。そもそも今の言葉は、答えを欲している風でもなかった。今も彼女の視線は、自分ではなく窓の外を流れて行く景色を見つめている。

その視線につられて、同じく斎も外に眼をやった。

地面は、緩やかな湾曲を描き、そしてその端で、上空へと湾曲していく大地は、白い霞に隠されて消えていく。やがてそれは白から青へと代わり、やがて澄み渡る蒼い空に、薄い雲が流れていく。

それは偽物だ。ホログラフィック 本来は、この上空で誰かが暮らしている大地が見えるはずなのだから。しかしそうと分かっているにもかかわらず、斎は、その空は美しいと思った。

だからきつと、地球の空はもっと美しいのだろう。

「綺麗ですね」

「ああ」

素直に答える。毎日のように見ているこの光景が、何度見ても飽きることがないのは不思議なものだ。本来、コロニーに青空はなかったが……精神的にどうかとこういうような話になったらしく、上空には、精巧な青空を模した立体映像が映し出されていた。

コロニー。かつて提唱され、そして様々な経緯を辿り、そして今に至った人の居場所。

それはかつて、宇宙にある仮初めの宿として造られた。しかし今や、人類が決して欠かすことの出来ない居住の地となっている。

たとえば今、自分たちが暮らしているこのコロニー……日本国第二十一番コロニー『アストラライア』は、およそ360万人がその生を営んでいる。それが日常であり、それが今の人々の一生だ。

……人は、コロニーで暮らし、コロニーで死ぬ。

もちろん、それが月ということもあるし、火星ということもある。あるいはもしかすれば、ようやくテラフォーミングが始まった、地球ということもあるかもしれない。

しかし総じて言えば。……人は今、宇宙で生きている。

不意に、クレードルの機械音声が、目的地への到着を告げた。

景色が急速に変化していく。クレードルが音を立ててその速度を弱めると、青空だった景色は漆黒に変わった。ターミナルの中に入ったのだ。

がしゃり、と音を立ててクレードルがドアを開く。到着だ。

さて、と鞆を掴む。

「それじゃあ、行こうか。学校に」

「はい」

微笑みながら頷いて、クリスマスも立ち上がる。

結局。最後まで、彼女の言葉の意味を聞けないままだったと、

斎は思った。

だが、それでもいい。時間は山ほどある。聞きたい時に聞けばいい。彼女の話したい時に、聞いてやればそれでいい。

きっと、人生とはそういうものなのだろう。

第一話 いつもの朝に（後書き）

話数が話数なので、二話につき一話でまとめて更新しようと思ったんですが、それもそれで面倒なので。なお説明は読むのが面倒臭くなりかねないので極力少なめですが、世界観については徐々に徐々に明かされていく予定です。11/4 一部本文を修正しました。

第二話 機甲学校

かくして、入学式である。

堂々と「機甲正鳳学院きこうせいほうがくいん」と書かれた校門へと背を向け、意味もなく天を仰ぐ。場所は間違いないし、時間も問題ない。問題ないのだが……。

「何だか、見られてる気がするんですが……」

気がする、で済む問題では無論ない。校門を潜ろうとする生徒たちは、校門に背を向けて佇む二人に、好奇心と奇異の目を向けて行った。隣に佇むクリスは、借りてきた猫のごとく下を俯いていた。

「落ち着け。別に正体が看破されたわけじゃあるまい」

「で、でも、でもですよ？ 万が一ということもっ！」

「いや、ないと思うが」

もしその万が一が起こっていれば、こんな程度で済むはずが絶対がない。

「し、しかしですね……じゃあなぜ、皆私のことを見ていくんですよう……ジロジロと……」

「それは」

生徒じゃないから、と言いかけて、やめる。今日は入学式だ。無論、父兄と共に来る人間などゴマンといる。実際先ほどから何度も、父兄らしき人物が校門を過ぎ、同じような目線を自分たちに投げつけていったのである。

ではなぜか。もちろん、彼女の正体が看破されたということではないだろう。

となると……

「……やはり、クリスが美人だからじゃないか？」

これしか思いつかないな、と思いつつ斎は言った。

先ほどから言っているように、隣に立つクリステイーナ・キルヒアイゼンという少女は、控え目に評価してみても絶世の美少女だ。そんな人間が、校門の前に佇んでいるとなれば、ジロジロと見ない人間のほうが少ないだろう。

そしてその瞬間、斎は理解した。男性に限りだが、少女に視線を向けた後、斎をなぜか殺気やら悪意やらを乗せた視線で見ているのだ。どうやらそれは、何の理由もなく本能的に憎たらしいとか、なんとなく顔がむかつくとか、前世で敵対していたからとか、そういった短絡的な理由ではなかったらしい。

ふむふむ、なるほど、と彼は顎を指で擦る。

その隣で、少女が顔を真っ赤にして俯いていたのだが、それに気づく気配もなく。

「しかし……どうして、わざわざこんな目立つところに居なければいけないんでしょう……」

さらに幾度目かの視線を浴びたあと、少女は嘆息しながら疑問を告げた。

「いや、ここで待っていると言われた。迎えに行くから、とな」

なるほど、と頷きながらも、更なる視線を浴びせかけられ、少女はさらに沈んでいく。

機甲正鳳学院。名の示す通り、日本の有する機甲学校である。機甲学校。耳慣れないこの言葉は、近年によって創始された学業形態だ。

機甲……アーマードと称される大気圏内外で活動可能な装置、すなわちロボット。これを研究し、開発し、そして操縦するために創始されたものだ。

ただその比率は、前者二つにくらべ、最後の一つに重きが置かれている。即ち、操縦だ。言ってしまうえば、機甲学校とは軍事用の機

アサルト

甲兵器のパイロットを育成する、軍学校の類である。

こうした機甲学校の創立には、ここ百年のうちに高まる軍事的緊張によって、国民皆兵ならずとも、パイロットの一部の技術を底上げすることで、軍備を拡張しようという中央政府の思惑が。

などと、益体もなく齋が考えていた、その最中。

ふと、構内に視線を向けると、一人の少女と目に合った。恐らく学院の生徒だろう、凜々しい、という言葉が似合いそうな少女だ。それが真つすぐにこちらに走って来る。

「すまない、待たせたな」

自分たちのすぐ目の前で立ち止まると、息を切らした様子もなくそう言った。

その黒髪をセミショートにした少女は、どうやら上級生らしかった。その身に纏った白と碧を基調としたブレザーに、上級生の証である青のワッペンが見て取れる。

瞳の色は、日本人として平均的な黒だ。背は、齋よりはやや低いが、女子としては長身だろう。

恐らく彼女が、今日待ち合わせの予定だった人物なのだろう。それを早々に理解した齋は、「いえ」と首を振った。

「こちらの方が早く到着してしまっただけですので、謝られることは……」

齋の言葉に、「そうか」と彼女は少し笑って答えた。

改めて近くで見ると、なるほど、確かに美少女と言える類の少女だろう。凜とした静謐な空気を纏っているような気さえもする。

「九桐齋くん、で間違いはないか？」

「ああ……はい。九桐齋です。よろしくお願いします」

齋の言葉に「そうか」と頷くと、少女は横に佇むクリスへと視線を向けた。

「それで……そちらの方は、血縁の……？」

少女の目線に倣って、クリスを見る。無論、事前から完璧に用意していた笑顔で、クリスは即答した。

「クリス・アルヴァンスと申します。血縁、というわけではありませんが、斎の義姉として来させて頂きました」

「そうですか……いや、失礼なことを聞いて、申し訳ない」

少女は申し訳なさそうに顔をしかめると、深く腰を折った。

苗字も違うのに、義理の姉。そういったややこしい事情を汲み取ったのだろう。だがそれに、クリスは微笑んで答えた。

「いえ、大丈夫です。大した事情ではないですし、私も斎も、気になんてしていませんから」

少女が、今度はこちらに視線を送って来る。斎は迷いもなく頷いた。

「そうか……」

それで納得したのか、少女は顔をあげ、小さく微笑んだ。

「ありがとうございます。ああ、そうだ」

何かを思い出したのか、少女は呟いて再び斎と目を合わせ、握手を求めて手を差し出した。

「私は細峯結莉。三年だ。正鳳学院の風紀委員を務めている。よろしく頼む」

そう言って、朱色の腕章を掲げて見せる。それがどういう役職なのかはいまいち分からないが、斎は「はい」と頷いて彼女の手を握った。

「よろしく願います、先輩」

「ああ、よろしく」

凜とした空気がふつと緩む。

本当に自然な笑顔だった。思わず 自分の中の”何か”を想起してしまうような。

しかし、その”何か”が表層に現れるよりも前に、彼女 結莉

は笑顔を消し、真面目な顔で向き直った。

「それでは、今から体育館の方へ案内する。クリスさんの方は、他の委員が案内します。おい！」

彼女が背後に向けて呼ぶと、校庭で何か話しながら周囲を見回していた生徒たちのうちの一人が、小走りに走り寄って来る。

「駒沢、この方を父兄方の席に案内しろ」

「はい、分かりました」

駒沢、と呼ばれた少年は、柔らかな笑みを浮かべて頷いた。同性の目から見ても、魅力的に映る類の笑顔だ。爽やかな好青年、という言葉が一番似合うだろう。

彼にしか聞こえない声で、『頑張ってください』と告げてから。

こちらです、と案内を始める少年に従って、クリスは歩を進めた。

「随分と綺麗なお姉さんだな」

歩きながら告げる彼女の言葉に「そうですね」と答えるわけもいかず、答えに窮しつつも校舎へと視線を向けた。

改めて見れば、まあ、普通の学校だろう。もちろんそう違いがあるわけではない。

ただ……意外な点の一つ。

(監視カメラスファイアの数が少ないな……)

通常、現代の学校のみならず、施設という施設のほとんどは、監視カメラが大量に設置されている。

『スファイア』と呼ばれる、球状の監視カメラだ。全方向に対する監視撮影が可能で、かつてのカメラにあったような視覚は存在しない。それは学校とて例外などないはずだった。

と、こちらの視線に気づいたのか、「目ざといな」と結莉は

小さく笑った。

「うちの学校は、生徒の自主性を尊重している。監視カメラの類もあまりない。まるでないわけではないが」

「へえ……」

「とはいえ」

彼女は腕につけている朱色の腕章を、もう片方の手でくいと引っ張って誇示しながら、告げた。

「悪さをすれば捕まる。当たり前の話だ。そしてその当たり前を執行するのが、我々の役目だ」

「なるほど」

風紀委員会。確かに、高度情報社会と化した現代では、必要とは思えない活動だ。

もちろん、監視カメラがあつては落ち着かないという人間もいるだろう。ただ、スフィアの記録映像は設置したマスターによる開放キーがなければ閲覧は不可能だし、スフィア自体もほとんど目立たないように設置されているゆえ、そうそう気になるものでもない。

そして最近の機種では、『登録者』として登録されたメンバーであれば、記録のオン・オフを切り替えもできたりもする。とはいえその記録は残るのだが。

よって現代では、問題になることはほとんどない。息苦しいと思うことはあるかもしれないが、言ってしまうえば生まれた時から”そう”なのだ。多くの人は、あまり気にすることもなく一生を終えていく。

「ま、逮捕するような機会は無いに限るが……機甲学校の半分は荒くれた。勢い余って、くだらんことをする連中がないとは言えない」

「そうですね」

教官する一方、心の底でその老成ぶりに感心する。

「今、年寄り臭いと思つたら」

「いや、まったく」

平然と答える。ふん、と鼻息を荒く吐きだしつつも、少女は前へと足を進める。

十分ばかりを、少しの雑談を交わしながら歩くと、かくして職員室へと到達した。

「失礼します」

職員室の扉を開く　今時にして珍しい手動スライド式だ　結莉に倣い、齋も一礼して職員室へと足を踏み入れた。

職員室、と一口に言っても、かつての西暦時代にあったような、紙による書類管理は既にほとんど姿を消している。とはいえ、通常の学校ならともかく、この学校のような機甲学校では、職員室の雑然さは数世紀前から変わっていない。

オフィスにありがちなテーブルの上には、三面型の大型のコンピューターが設置され、机の上には大小様々なメモリー装置やら備品やらが、また違う机には何かの説明書らしき大型の冊子が山積みになっていた。恐らくこれは、停電等の理由で電子機器が全てストップした際に使用する緊急マニュアルなのだろう。

結莉の声に反応したのか、一人の女性教師が、啜っていた煙草を灰皿へ放り投げ、立ち上がるのが見えた。

「おー、御苦労さん、細峯」

「いえ」

近づいてきた教師らしき女性の言葉に、結莉は首を振って答えた。ぼんぼん、とその肩を叩き、教師らしき女性は目線を齋の方へと向ける。

「私は各務紗枝。一応教師をやってる。君の担当ということになるそうだから、よろしく、九桐」

「はい、よろしくお願ひします」

「うんうん、礼儀正しいのはいいこったねー」

しきりに頷きつつも、ほれ、とこちらに差し出してくるものがある

った。

銀色の小型機械だ。サイズとしては名刺程度だろうか。一本の剣と六つの翼を模した校章が、表面にプリントされている。

受け取ると、ずしりとした感触。紙で出来た手帳よりも重い。

そして渡すや否や、「じゃ、私はこれで」とさっさとどこかに行ってしまった。説明も何もない。

思わず視線を彷徨わせると、隣で聞いていた結莉が、はあ、と小さくため息を吐いた。

「それは生徒手帳だ。横のボタンを押せば、ホログラフィックUIを起動できる。登校する時や、火器類を借り出す時に必要になる。

制服の内ポケットにでも、常時入れておけ」

「了解です」

先ほどの教師　紗枝が出て行った方角を見やる。廊下に出て行ったのだが、もうどこにも影は見当たらない。

「……随分と、その……」

「適当な先生だ、か？」

こちらを見ずに、結莉は告げる。まあ、と小さく頷くと、彼女は何度目かの溜め息を吐いた。

「否定はしない……が、一応あれでも優秀なんだ。特に電子機器分野はな。何かと学ぶことも多いだろう」

なるほど、と思う。

電子戦は今や、戦術の中核を成す一柱だ。そのプロフェッショナルというなら頷ける。機甲学校の教師が、生半可な実力で務まるわけもないのだ。

「さて……そろそろ体育館に行くか。もうすぐ式が始まる」

はい、と頷きかけて　廊下に面した窓の向こう、中庭で、数人の男女が揉めているのが見えた。正確にいえば、紅い髪の少女一人

と、それを取り囲むようにした三人の男。

「どうした？ ……む」

こちらの視線を追ったのか、同じものを視界に収めたらしい結莉が、小さく唸った。

ちっ、と小さく舌打ち。

「何をやってるんだアイツらは……」

その声には隠しようのない苛立ちが滲んでいた。

カツカツと廊下を横切つて窓に歩み寄り、一息に開けたかと思えば、窓枠を飛び越えて中庭に降り立った。スカートがふわりと舞うが、気にした様子もない。斎は、若干慌ててその後を追った。

「お前ら、何をしてる！」

大声一喝。ぴくり、と四人全員の肩が震える。だが、そこからの反応は対照的だった。

まず斎から見えたのは、男に囲まれていた女生徒の顔だった。表に出してはいなかったものの、瞳の中には、隠しようもない怯えの色が混ざっている。

彼女は、こちらを視界に収めたかと思うと、少しだけほっとしたような顔をして、次いで強気に眉を吊りあげた。

「離しなさいよっ！」

掴まれていた腕を勢いよく振りほどくと、囲んでいた三人の男を強引なダッシュで振り切つて、こちらへと走つて来んで来た。そのまま、自分たちの後ろに回る。

男たちは、少女を追いかけけるような真似はしなかった。一人はちつと舌打ちして目を背け、一人は明らかな怒りをにじませた目でこちらを。否、結莉を睨んでいる。そしてもう一人、女生徒の手首を掴んでいた男は、こちらを振り向こうとはしなかった。

それらを意に介した風もなく、結莉は一步を踏み出し、口を開いた。

「もう一度問おう。貴様らは何をしている。もうすぐ始業式のはずだが」

男たちは答えなかった。痛々しいほどの沈黙。

たつぷり数秒を沈黙で待ってから、結莉は首を振った。

「黙秘か、いいだろう。話は査問委員会で……」

「それには及びませんよ、先輩」

結莉の言葉を遮って、三人のうちの一人　こちらを振り向いていなかった男が、振り向いた。

至って普通の少年だ。顔は、恐らく平均よりも整っている。どうやら二年生であるらしく、証である赤のワッペンが見てとれた。ただ……薄い笑いを浮かべたその顔は、どうにも齋を嫌な気分にする。

「……名前は？」

「二年四組の城里です。……彼女とは、ちょっと話をしていただけですよ」

城里、と名乗った少年は、薄い笑みを張りつかせたまま告げた。

「話だと？」

結莉は言いながら、後に隠れたままの少女へと視線を配った。金髪の少女は、強気な目で首を振る。

「嘘です。こいつらはいきなり、私の腕を掴んで……」

「おっと、君こそ嘘はいけないなあ、アンジー？」

大仰な仕草で、城里は肩をすくめた。アンジー、と呼ばれた少女は、ぴくりと形のいい眉を動かすと、結莉に向けていた視線を、城里へと向ける。

「僕は挨拶をしたんだ。でも君は無視をした。だから、腕を掴んで止めただけさ。違うかい？」

「挨拶？ あれが？ どう見たって因縁つけてただけじゃない！」

「でも、それを証明する手段はないだろう？」

その言葉に、アンジーは表情を嫌そうに歪め、その視線で憎悪を

叩きつけた。

「おお、怖い怖い。……でも先輩、分かるでしょう？ 僕たちは何も悪いことはしてないんですよ」

「ふむ……」

白々しい、とも言える類の少年の言葉に、思案するように顎に手を当てた。

確かに一見すれば、男三人が寄ってたかって、少女に詰め寄っていたようにしか見えない。とはいえ、少年たちに危害を加える積もりはなかったのかもしれない。

いずれにせよ、判断は難しかった。証明できる第三者がいらない、自分も彼女も、公明正大な裁判官というわけではないのだ。容易に判断できるものではない。

軍隊であったなら、鉄拳制裁かトイレ掃除を任じられて終わりだろう。

……しかし、軍学校に等しい機甲学校ではあっても、彼らはあくまで学生でしかない。

アーマードは兵器以外にも用いられる。それゆえ、そのパイロットの養成所である機甲学校は、表面上、ただの養成校として済まされる。

これは現在否応もなしに緊張を増している、各国間の関係を考慮した一手だ。しかしその『表面上』という言葉で括るのなら、ここは只の学校、学び舎でしかないことになる。

そして残念なことに、学校という施設に蔓延ることなかれ主義は、西暦時代からまったく変化していないのである。

(確かに、手が出せないな)

斎は頷いた。少年の採った選択肢は、確かに正しい選択肢だろう。通常なら「もういい」で済まされ、何事もなかったかのように過

せるに違いない。

ただ、ひとつだけ計算違いがあった。

「……そうだな。なるほど、ではこうしよう」

それは、細峯結莉、この女生徒の性格である。

「これから私は君たちを、委員会の権限により制裁する。私に勝てたら、この場は見逃してやるう」

第二話 機甲学校（後書き）

第二話目更新です。今回は少々推敲が長引いてしまいました。ヒロインその2とその3が登場。次回はようやくロボットじゃないけどバトルです。そしてヒロインその4が登場します。あれ、なんか多くね？

第三話 始業式と面倒事

制裁、という言葉の意味を取り違えるほど、少年たちは愚かではなかった。

構えも取らず、結莉は首を鳴らす。その姿に、城里啓一しむらぎけいいちは小さく舌打ちした。

(これだから、怪力女は……っ！)

ささみゆいり細峯結莉。言わずとされた”虎の子”風紀委員。正規の風紀委員は学年に二人ほどしか存在せず、そして彼女 細峰結莉は、三年における唯一の風紀委員だ。

純粹な力による学内ヒエラルキーではその頂点とも言える、風紀の鬼。しかしかにかにこの女はいえ、見逃さざるを得ないと思っていた。

(クソッ……！)
毒づく。

大人しく降参するという選択肢はなかった。風紀委員会では査問にかけられれば、待っている結果はひとつだ。自分の輝かしい経歴に、紛うことなき傷がつく。

その回避手段は、既に途絶えたと言ってよかった。

(いや……待て)

そつだ、違う。まだ途絶えていない。

不意に思い至ったその結論に、思わず緩みそつになった頬を自制心で制御しながら、城里は柔和に微笑んだ。

「……先輩。さっきの言葉は嘘じゃないですよね」

「ん？」

「先輩に勝つたら、見逃してくれるってヤツですよ」

そつ言つと、彼女は「ほう」と小さく呟き、口を歪めた。

「無論だ。私に勝つたらこの件は不問にしてやる。ついでにまあ、

始業式をサボるぐらいなら大目に見てやらんでもない」

その言葉に、城里は口を歪めた。

無論、敵うと思っっているわけではない。相手はあの細峯結莉なのだ。マトモにやっただって敵いようがないのは、よくよく分かっている。

だとすれば……マトモな方法でなければいい。

目配せ。それまで、揃って怒りと不安と動揺を浮かべていた二人の男は、その意味を余すことなく受け取ったのか、小さく、しかし凜猛な笑みを浮かべて頷いた。

そう、三対一、だ。それは圧倒的なアドバンテージ。

とはいえ、それは向こうも分かっているだろう。分かっているうえで言った条件なのだ。ゆえに 彼は、ズボンの内側に隠していた”それ”を、迷うことなく引き抜いた。

「なに……？」

三人の男が、同時に引き抜いたそれに、結莉は小さく声を挙げた。黒光りする棒きれ。それは、違いようもなく制圧用警棒だ。硬質ゴム性のもので、下手な金属製よりも威力がある、立派な凶器。

「別に、武器はなしだ、なんて言っただけじゃない……？」

片手に警棒をぶらさげながら、にやにやとした顔で城里が告げる。

確かに、それは言っていない。無論、三体一であろうことも理解していた。しかしよもや、そんなものを持ち出してくるとは、という唇を噛む思いと共に、じろりと三人を見やった。

「……ふん。警棒の携帯は許可されてないはずだがな。他にも色々余罪がありそうだし……」

結莉が呟くと同時、城里が嫌そうに顔を歪めたが、その得意げな

顔は崩れなかった。

しかしこの時点で、彼は一つ失念していた。この場にいることは結莉だけではないこと。即ち、その隣に立つ目つきの悪いガキが参戦してくる可能性を。

そして目つきの悪いガキ、こと九桐齋くどういつきは、結莉の動揺に気づいていた。

結莉のその表情も、立ち振る舞いも、ほとんど変化はない。しかし微細ながらも動揺している。恐らくだが、単に隠しているだけだ。その理由も簡単に察しがついた。三対一、しかも相手は制圧用の警棒を持っているのだ。間違いなく予想外だろう。そしてその予想外に対応する自信……確信は、恐らく彼女にはないのだ。

(……なら)

この時、既に心は決まっていた。

眼を開き、小さく深呼吸。次いで、後で怯えている赤髪の少女に肩越しに告げた。

「少し、離れてください」

え？ と少女が問い返す間もなく。三人の男たちが警棒を振り上げながら 結莉へと突進した。

そして、男たちの一歩踏み出した足が地面につくよりも前に……齋の足が、全力で地面を蹴った。

「なにっ……!?!」

背後で驚愕の声。それを置き去りに 九桐齋は疾駆した。

一瞬で結莉と立ち位置を入れ替えた齋は、瞬きほどの暇もなく、一番前にいた男の眼前に躍り出る。先ほど長広舌を披露していた優男ではない。隣で立っていた、屈強そうな大男。その片割れだ。

まさに一瞬。互いに突進し合う形となったこともあり、一瞬で彼

私の距離、その間合いを走破した斎は、しゃがみこむような形で男の懐に入り込む。

左足で地面を踏みしめ、身を捻るように 真上に掌底を打ち込んだ。

「ぐえッ……！」

まるで弾丸のような速度で打ち出された掌底が、男の顎を的確に打ち抜く。対して、打ち抜かれた側のダメージは甚大だ。

カウンター気味に、それも顎へのクリーンヒット。斎に伝わる手ごたえが、男の意識を確実に刈り取っただろうことを伝えてくる。

男が眼を剥いて倒れこんでいく間にも 斎の目は次の標的を捉えていた。

城里と、その前を走る厳めしい顔つきの男。後者は、幅広の胴周りを持ったこれまた大男だ。ダッシュの最中、二人ともが、一瞬で起きた光景を理解できないまま目を見開いている。

であるなら。無論、このチャンスに逃す手などありはしない！

地面を右足が捉えたその刹那、着地した右足に強く力を込める。

姿勢は迎撃。大男がそのことに気付いたかどうかは分からない。ただ確実なのは、この一瞬、今の勢いでは容易には静止できないこと。クロス・タイミング。完璧な間合いに男が足を踏み入れた瞬間。

「シッ……！」

短い呼吸と共に、右足で地面を抉り取るように加速。

中空に飛び上がるように疾駆した体のままに、左の膝を男の腹へと叩きこむ……！

「がつ……！」

熊のような厳めしい男が体を二つに折る。しかし無論、それだけでは倒せない。相手の体型からして、今の一撃が必要十分なダメージを与えたとは思えない。ただの肥満なだけの男ならともかく、相

手は本物の軍人を目指して日々訓練を積む、いわばプロの卵なのだ。それを理解していた斎は、そのまま地面に着地した右足を起点に、迷うことなく左肘を男のこめかみに突き入れた。

「げっ！？」

状況把握もできないまま、わけもわからないまま。情けない声と共に、男は地面に昏倒する。

五秒足らずで二名を無力化した斎は、自分のほうに倒れこんでくる男を片手で地面に転がしてから、もう一人 城里へと向き直った。

彼は、未だ呆然としていた。片手に警棒をだらりと下げたまま、もう突進しようという気にもならないのか立ち尽くしている。

「城里さん、でしたか」

「ひっ……！」

名前を呼ぶと、びくっ、とその肩が大きく震えた。眼が恐怖に震えていた。

やりすぎたか、と反省しつつ、その眼を見かえして斎は言葉を続ける。

「……まだやりますか？ そろそろ、降服をお勧めしますが」

「あ……ぐ……」

何かを呻き、答えようとして がしゃり、とその警棒を落とす。そのまま地面にうずくまる。

ふう、と溜め息を吐いて……振り返ると、待っていたのは驚きの光景だった。

結莉が、こちらを呆然としたような顔で見つめていた。口をぱくぱくと開閉させ、握った拳の置きどころを探すようにきよるきよると眼を泳がせている。ここ数十分の間に見た彼女の表情とは全く違うそれに、斎は思わず苦笑してしまった。

と、その苦笑を、どうやら違う意味に取ってしまったのか。

「……勝てたんだからな」

まるで拗ねたように口をとがらせ、彼女はそう呟いた。

思わず、「へ？」と素っ頓狂な声を上げる斎に、小さく咳払い。

次いで盛大なため息を落とした。

「見事な手際だ、ああそれは認めよう。だが……まったく。お前が片づけてどうする？」

「はあ」

気のない返事に、ますます眉間にしわを寄せて、結莉は斎を睨みつけた。

「いいか？ 風紀委員会以外による制裁は禁止されている。自衛なら別だが、さっきの別にお前が襲われてたわけでもない。要するに、さっきのはただの暴力ということだ」

「……む」

理屈は分かる。そして分かるがゆえに、斎は顔をしかめざるを得なかった。

要約すれば……さっきの行為は、自分の役割を逸脱したものだっただ、ということ、なのだろう。

無論、仕方がなかったという想いもある。あのままであれば、彼女が敗れていたこともありうるかもしれない。まあそれは、彼女の實力を知らないがために断言できることではないが。

「でも、助けてもらったのは事実です！」

ざざっ、と音を立てるように、自分と結莉の間に割り込んでくる影があった。

さきほどの、赤髪の女生徒だ。確か、アンジー、と呼ばれていたような気がする。こちらを庇うように、結莉に対峙している。

「感謝されこそすれ、責められる云われはないと思います！ 彼を査問委員会にかけるというのなら、私の全権限を賭して反対します

「いや、私も彼を査問にかけるつもりはないよ、アンジェリカ・ロス第二学年長」

そう即答した結莉に、少女は「えっ」と小さく驚く。

「私だつて……彼に助けてもらつたのは事実だ。今のは少し危なかつたからな。まあ、少しだけだが」

少し、の部分を妙に強調する結莉に、思わず苦笑が滲みかけた。

……のだが、視線にあからさまな冷気が混ざり始めたのを見て、寸前で引つ込めた。

結莉の言葉を聞いた少女は、明らかにホツとした表情を顔に浮かべ、胸を撫でおろして斎へと振り返つた。

「ええと……助けてくれてありがとう。私はアンジェリカ・ロス。アンジーって呼んで。ええと……」

「九桐斎。俺も斎でいいよ。よろしく、アンジー」

「うん、よろしくね、イツキー！」

少女がぱつと花のように笑つた。あるいは、先程の強気な態度よりも、こちらの方が素顔なのかもしれない。

改めて見れば 同じ米国人同士を比べて見ても、少女はクリスマスと違った種類の美少女だった。紅色の髪と、オリーブグリーンの瞳。クリスを綺麗だと称するなら、アンジーはまるで香る花のような愛らしさと、健康的な美しさに満ちていた。

お互いに、笑顔のまま握手を交わす。少女の手は、驚くほどに柔らかかった。女性の手なのだ……などと、今更わかりきつたことを考えて、柄にもなくドキリとしてしまう。

しかし「柄にもなく」などと無意識に告白したように 純朴さなどというものが自分に似合わないのも、確かに真実なのだろう。わずかな滑稽さと共に、瞬間に泡のように消えてしまった。

「本当にありがとう。少しだけ……少しだけ怖かつたから、助かつ

「ちゃた。それに」

「それに？」

問い返すと、少女は頬を赤く染めて俯いた。

「ごによごによと囁くような声が聞こえましたが、その明確な意味までは届かない。彼としては首を捻るほかなく……不思議げな顔をしている齋に、アンジーは焦った風に「何でもない」と手を振った。

と。唐突に、二人を見ていた結莉が、横合いから「あ」と声を上げた。

しかしその間抜けな声を馬鹿にすることなど、当然誰も出来るはずがない。なぜなら、その視線を追った齋とアンジーも、同じようなものだったからである。

視線の先は校舎に架けられた時計。中庭から見えるそれは、既に九時五分を示していた。

「まずっ、始業式!？」

しまった、という思いは全員同じだったのだろう。齋が声を上げるまでもなく、アンジーは焦ったように声を上げた。

現代のセキュリティは堅牢である。それは学校であつても例外ではない。そのような昨今、始業式のような行事が始まれば、体育館は施錠されるのが常である。

当然、教師に言えば鍵を開けてはもらえるが、それが少々ばかりややこしいことであることは間違いもなく。

「あー」

困ったな、と苦笑気味に結莉が頬を掻いた。

「わかった、仕方ない。今回は二人とも、風紀委員会の仕事に付き合ってもらった、ということにしておこう。減点対象にはならないようにはなるはずだ」

ただし、と結莉は付け加えた。

「君の罪を免罪には出来ないぞ、九桐くん。とはいえ、もちろんそ

のまま裁くつもりもない。安心して、放課後生徒会室に来るように「いいな？ と念を押されれば、うなずく以外の選択肢など取れようはずもなかった。

面倒なことになった、と思う。

一つは親切心であった。そしてもうひとつは自衛のためだった。より正確に言えば、前者は三、後者は七ぐらいだろうか。

いずれにせよ、あのときにしたことは後悔してはいない。ただ結果として、今自分は生徒会室の扉の前で、面倒臭そうにため息を吐いている。それは事実だ。

(安心して、といわれてもな……)

先ほどの言葉を思い出す。

あの後「三人を連行する」と言った結莉に付き添って、とりあえず二人を医務室に、一人を風紀委員会にまで連れて行った。

そして気が重いままホールルームに向かい、三十分後には解散。今日一日は始業式とホールルームによる説明だけで、他には何もない。

しかし、斎はそのまま帰路につくことは出来なかった。

風紀委員である彼女 細峯結莉の言葉を、そのまま知らない顔で無視することが出来るわけもないのだ。何せ、いわば風紀委員会はこの学校における警察、そしてその委員からの言葉ということは、警察署からの出頭命令にも近い。無視すれば、どんなペナルティが待っているかもわからない。

そんなこんなで 斎は、「少し待っていてください」という生徒会役員らしき女性の言葉どおり、ドアの手前にある壁掛け式の椅子に腰掛けていた。

ドアの向こうで、今も何か話し合われているのは空気でわかる。それが自分のことだと思えば、殊更気も重かった。

「ごめんね、こんなことになって」

斎の溜息に気づいたのか、隣に座る紅い髪の少女 アンジェリカ・ロスことアンジーは、申し訳なさそうに顔を歪め、俯きながら言った。

……もとより、生徒会室に呼びされたのは斎一人だけだ。当然、彼も一人で行こうとしたのだが、どうしてもついてくると言っただけで聞かなかった。

別々のクラスならば容易に断れたのだろうか………どういつ因果なのか、アンジーと斎のクラスは同じ二年六組だった。

「いや……あれは俺が勝手にやったことだから」

少女の謝罪に首を振ると、アンジーはふっと柔らかく微笑んだ。

「……やさしいね、キミは」

斎にとって、それはまったくの嘘偽りない真実であったのだが、そう言われてしまえば返す言葉もない。

言い訳を重ねたところで、残るのは無様だけだ。かつて師に言われた言葉を思い出す。重要なのは、自分の起こした行動が、誰かにとっての災いにならないように全力を尽くすことだけだ、と。

ピピ、とドアのロックが解除された電子音と共に、ドアが小さく横にスライドした。

半分ほど開いた扉の向こうから姿を現したのは、小柄な少女だ。

可愛らしい、という形容が最も似合いそうな、そんな少女である。しかしその相貌とは裏腹に、その目には冷静で冷徹な光が垣間見えた。

先ほど、斎にここで待つように告げた、生徒会役員らしき女生徒だ。

「……九桐斎さんですね。お入りください」

見やるや、無表情のままに斎を招いた女生徒は……ちらりとアンジーへと視線を向ける。

「あ、あの……私」

「彼だけで結構です」

にべもない。少女は、隣で立ち上がるうとしたアンジーを、機先を制する形で無表情に遮った。

しかし、それは仕方ないことなのかもしれない。師の言葉に照らせば……彼女もまた、自分の責で他人に害が及ばぬよう、努力しているだけに違いない。

しかしこの問題は、結局のところ斎一人が、斎一人の責任で引き起こしたがゆえに。その厚意に甘えるつもりは、元よりない。

不安げな顔で斎を見るアンジーに手を振って、一礼の中に溜息を隠しながら、彼は生徒会室に足を踏み入れた。

生徒会室は綺麗に整頓されていた。

円卓を模した巨大な机がひとつと、奥に、生徒会長の席らしい個人テーブルがひとつ。他にも、普通の学校で考えれば、豪華すぎるような設備がいくつも散見された。

機甲学校における生徒会長の権利は、時に教師をも凌ぐ。その意味を誇示するかのごとく、学長のような席に悠然と腰掛ける一人の女生徒。

眼が合うと、ウェーブのかかった長いブロンドの髪の下で、彼女は優しく微笑んだ。彼女こそがおそらく、全校生徒による熾烈な競争を潜り抜け、その頂点へと立つ人物なのだろう。その物腰には、他の生徒にはないような余裕が感じられた。

「はじめまして、君が九桐斎くんね。私は生徒会長の四方院楓。よろしく」

「はい、よろしく願います」

頭を下げると同時に……。

その優しい声聞きながら斎は、自分に対する方針は、そう悪いほうに転んではいけないのかもしれない、と感じた。悪い話ならば誰であれあるはずの硬さが、少女にはなかった。

「さて、まずはじゃあ全員の自己紹介から……」

「会長。そんな時間はありませんが」

と、冷静に口を挟んだのは、先ほど見た小柄な少女だ。

全員、というのとは無論、この部屋にいる全員、ということだろう。広い部屋に置かれたデスクには、七、八人の男女がめいめいに腰掛けていた。確かにここにいる全員が自己紹介するとなれば、それに時間がかかるだろう。

「えー、いいじゃんそれぐらい」

ぶーぶーと口を尖らせる生徒会長　四方院楓に、対する少女は無表情に首を振って即答した。

「よくありません。今日は始業式でしたから、閉館も早い。もうあまり時間がありません」

むっ、と頬を膨らませる楓に……ふと、椅子に座っていた生徒たちのうちの一人が、声を上げて笑った。

茶髪を長めに伸ばした、軽薄そうな印象の優男だ。青の校章^{ワッペン}……即ち、一学年上の先輩だ。

「はは、いいじゃん自己紹介。どうせこれから一年間も一緒なんだし?」

「……私も構わないが」

次いで首肯したのは見知った顔、結莉だ。

二人の言葉に、女生徒は、無表情ながらも小さくため息を吐いた。「まったく……春寺さんだけでなく細峯さんまで」

春寺、と呼ばれた男子生徒は、変わらず軽薄な笑みのまま、大仰

に肩を竦めた。

「そう言うなよ。その目つき悪いボウヤさ、二年の三人組……しかも武器持ちを、たった五秒で片付けたんだろ？ 興味あんだよ、俺もさあ」

「……それは、俺も同感だ」

横合いからの同意の声。

そちらを見れば、眼を瞑り、両手を組んで椅子に腰掛ける男がいた。大男というわけではなく細身だが、研ぎ澄まされたその気配は、まるで一本の刀のようにさえも感じられる。

「……だが、俺が興味あるのは真実だけだ。名前も経歴も、今はどうでもいい」

変わらない姿勢のまま淡々と語り終えると、片目だけ開いて斎を見やった。

「……二年。今一度問うが……先ほどの件、真実か？」
先ほどの件、というのが、先に話題に上がった、五秒で片付けた云々のことであろうことは想像に容易い。

斎は頷き ただし、と付け加えた。

「あれは相手方の油断をついた、いわば不意打ちです。十分な準備をされていれば、武装した三名を素手で無力化するのは、難しかったですと思います」

「つまり、相手が油断していたから？」

「ええ、でなくば無理だったかと」

口を挟んだのは、春寺、と先ほど呼ばれた軽薄そうな先輩の方だった。斎の言葉に頷くと、彼は結莉のほうへと振り返った。

「だってよ、細峰。その辺どうなん？」

話を振られると、結莉は「ふむ」と腕を組み、わずかに考え込む表情をして、首を振った。

「……確かに容易くはなかったかもしれん。が、不可能ではなかったと思う」

「買いかぶりですよ、先輩。あれはたまたま上手くいっただけで……」

「図らずも言い合っ形となった二人を引きとめたのは、二度ほど響いた、手を打ち合わせる音だった。」

「はいはい、皆さん。勝手に話を進めないの」

呆れた風に告げたのは、議長という体裁を取る生徒会長 楓だ。

二人は口をつぐみ、互いに彼女へと向き直った。

「さて、じゃあ自己紹介はとりあえず置いておいて。まず、斎君にひとつ聞きたいんだけど」

「はい」

頷くのを確認すると、こちらの様子を伺うように、彼女は口を開いた。

第三話 始業式と面倒事（後書き）

ロボットなのに生身バトル。デュエルしろy（ry
ロボットバトルは……二話ほど先の話になりそうです。
しかし、またもや中途半端な形に……！
申し訳ない限りなので今回は一週間後に更新します。
ということ、第四話は10月30日に更新です。

第四話 生徒会

「どうして、あの件に手を出したのかしら？」

「……どうして、ですか？」

ええ、と楓は頷いた。生徒会長のデスクに置かれた資料を、一枚めくる。

「状況は聞いてるわ。確かに、危ない場面だったかもしれない。貴方が手を出さなければ、結莉も何か、怪我の一つだってしてたかもしれない。でも」

そこまで語って、彼女は一呼吸を置いた。斎の目を覗き込むようにして、続ける。

「貴方は、どうして彼女を助けたのかしら？ だって、相手は武器を持つてるのよ。しかも三人。他にも、助けを呼ぶとか、逃げるとか、あったでしょう？」

「……それでは、意味がなかったのよ」

斎は頷くようにして、続けた。

「助けを呼んだところで、細峯先輩が怪我を負う可能性はありました。あるいは、何事もなく制圧できたかもしれないが……僕は先輩の実力を伺ったことがなかったのよ」

「まあユイなら、三人ぐらいは平気だと思うわ。ただ……貴方の言うとおり、ちょっとばかり軽く怪我をしたかもしれないけど」

ふうん、と頷きながら、楓はペンを走らせていく。

「逃げるという選択肢は最初からなかった、と。……なるほどね。そこがユイの評価するワケ、か」

ユイというのは、恐らく細峯結莉のことを指すのだろう。そう思

いつつ、斎はただ黙って聞いていた。

恐らく彼女は、助けられたというフィルターによって、自分を過大に評価しているのだろう……と、斎はそう思っていた。

実際、あの程度のことは、ある程度訓練された人間ならば難しくはない。ここは機甲学校であるわけだし、目立つほどのものではないはずなのだ。

などと思いを巡らせていると、ペンを走らせ終えた楓が、改めてこちらに向き直った。

「それじゃ、次ね。さっき、貴方をどうするか、一応私たちで話し合っただけだ」

と話しつつも、楓は結莉へと目を配る。その目線の向こうで、結莉は小さく頷いた。

「私からの要望はひとつだ。斎、風紀委員会に入れ」

「へ？」

わけがわからず、結莉と楓の間で、斎は視線を往復させる。

そんな様子に、楓ははあ、とため息を吐きながら、肩を竦めた。

「……まあ、こんな調子でね。風紀委員会は成績上位者しか入れないから、転入してきたばかりの彼には無理、って言っても聞かなくて。第一、二年はもう二人もいるじゃない」

「もともと、そんなものはただの慣習でしかないだろう？」

ふん、と鼻息も荒く胸を張ると、楓は困った風な、あるいは呆れたような それかもしくは、微笑するような、そんな複雑な顔で小さく笑った。

「で、私たちは反対。生徒のほうから不公平だ、って文句が出かないから」

「ちなみに、俺も反対ね」

さっと手を挙げて意思を表明したのは、春寺とかいう、例の軽薄そうな男だった。

それに、結莉が片眉を挙げて反応する。

「貴様、確かさつきは中立と言ってたろう」

「いやー、まあ、とはいえさ。風紀に人が余ってるのは確かなわけだし？ 足りてるのに追加する理由は特にないし？」

わざとらしく肩をすくめる春寺に、楓は「はあ」と小さくため息を吐いた。

「ひじりん」

「ヤー」

楓が何者かの名前を告げる。と、春寺の隣に座っていた、なぜかメイド服姿の女性が即座に首肯して、椅子に立てかけていた日本刀に手をかけた。

反射的に春寺が反応し、立ち上がるうとする。だがそれよりも早く音もなく抜刀したメイドが、その首元に白刃を押し付けていた。

「ちゃんと理由を話さないと首チョンパですよ、部長」

「ちょ、まっ、嘘、嘘です！ 話すからやめて食い込ませないで銃刀法って知ってる！？」

「ひじりん」

再び声をかけられ、今度は一瞬躊躇してから「ヤー」と応答。そのまま、再び刀を納め、元の席へと戻っていく。そして最後に、「……ちっ」と舌打ち。

「今『ちっ』って言ったよこの子！？ もうやだ怖い！ ボクお家に帰りたい！」

「お前が素直に話さんからだ。ふざけてないでさっさと話せ」

青くなつた春寺に、容赦なく結莉が追撃し、次いで浴びせられたその破壊力の籠った視線に、降参とばかりに両手を挙げた。

「あー、あれさ。最初は興味なかったんだけど、実際見てみるとね。ちよっと面白いと思って」

「なに？」

「要するに、執行部で使いたい、ってこと？」

疑問符を浮かべた結莉に代わり、指を立てて結論を言つてのけた楓に、春寺は「そゆこと」と首肯した。

「しかし……なら、風紀委員会と執行部の兼任なら」

「いや」

と、首を振つたのは、例の刀のような雰囲気を纏つた男だった。

「……風紀委員は、生徒会の役員にはなれん。これは校則で定められている。生徒会長といえど覆すことはできない。そういうことだな」

と、未だ腕組みの姿勢を維持したまま、静かにそう告げた。と、この場にいる半数近くが、驚いたような顔をして、春寺へと視線を集中させた。

「そうだったのか……」

「それは、知りませんでした。……よくご存知でしたね、春寺さん」

前半は結莉、後半は、例の無表情な小柄の少女だ。褒められた側は「いやあ、褒めてもなにもでないよ」と手をひらひらさせていた。

「まあ、前例がないことだしね。ついでに言えば、風紀委員は他の役職に関しても、兼任することはできないわ」

と、苦笑しつつ付け足したのは楓だ。

まあともあれ、と楓は首を振つた。

「風紀委員にせよ、執行部にせよ同じことよ、春寺君。まあ分かつて言ってるんでしょうけど……第一」

と、斎の方を指差して。

「彼の意思を、まず尊重すべきじゃないかしら？」

その言葉に、全員が押し黙つた。「むう」「やら」「確かに」「やらの
呟きが聞こえ、次いで、斎へとその視線が集中する。

つまるところ、こういうことなのだろう。風紀委員会に入れ、という結莉と、それに反対する 恐らくだが、この学校での重要な役割にあるであろう、生徒たち。

面倒なことになった、と斎は思った。目立つつもりなどなかったのだ。いや、正確に言えば、目立ちたくなかったのである。

しかし結果として、これだ。

自分を、ごく普通の生徒、などと自信を持って発言できるだけの経緯を、持っているわけではないのも確かだ。が、しかし、そういう風に過ごせるとは思っていた

さる友人が聞けば、「そりゃア……お前エ、無理つてもんじゃね？」などという言葉が返ってくるのは間違いないであろうが。

「……先輩」

そんな自分の本心を押し隠したまま、言葉を紡ぐ。

「自分の選択によって、自分や……他の誰かに、何らかのペナルティが課せられることは？」

「ないわ」

楓からの返事は、即答だった。

「たとえ断ったとしても、貴方や、他の人に対する圧力やペナルティなんてものは、一切ありません。そしてさせません。それは私、生徒会長である四方院楓の名に掛けて誓います」

「そうですか」

その言葉は誠実だった。信用できる、と思った。

分かる これは嘘でも、その場限りの言葉でもない。生徒会長としての名に相応しい、確かな誠実さだ。

で、あるならば。

「なら、俺は」

自分の本心を、迷わず告げるべきなのだろう。

かくして、帰り道。

談合を終え、生徒会室を出た斎は、その場で待っていたアンジーと合流し、下校の途へと着いた。閉館の音楽が流れ始めた校舎へと背を向け、校門へと向かう。

そこには誰の姿もなかった。どうやら、クリスは先に帰ったのだろう。

彼女はあまり、家を長く空けてはられない立場の人間だ。ここで自分を待っているわけにもいかない。そう思えば、疑問もなかった。

「あの……」

おずおずとかけられた声に振り向く。アンジーが、こちらを見ながら、もじもじと両手の指を重ね合わせていた。

無論、生徒会室から出たときに「問題なかった」ということは既に伝えてある。というよりも、出てくるなり心配顔で見つめられれば、そう答えるより他にもなく。

事実、大丈夫ではあった。学校生活に支障はないだろう。ただ、細峯先輩には悪いことをしてしまった……などと斎が考えていると、目の前の少女が、何を思ったか、いきなり頭を下げた。

「今日は本当にありがとう、イツキ。何から何まで、私は迷惑をかっけっぱなしで……」

その声色には、どこか苦悶が滲んでいた。恐らく、ずっとそればかりを考えていたのだろう。

悪いことをしたな、と思いつつ、斎は首を振った。

「いや。前も言ったけど、俺のやったことだから。迷惑なんて思っ
てないよ」

出来る限りの平静さと優しさをこめた声で言うと、「そっか」と顔を上げて、ようやく彼女は微笑んだ。

再び、並んで歩き出す……と、アンジーが、不意に斎の顔を覗き込むように、前に先回りした。後ろ歩きで進みながら、尋ねてくる。

「そうだ。イツキはさ、どうしてここに来たの？」

「どうして？」

再びアンジーの顔を見つめると、アンジーはむず痒そうに頬を掻いた。

「んーとね……そう。パイロットになろうと思った理由。イツキも、ドラグーンのパイロットになろうと思ってここに来たんでしょ？」

「……まあ、ね」

ドラグーン・アサルト。かつて開発され、現代の主力でもある、人型駆動兵器のことだ。多くの人間は、このドラグーンに憧れ、パイロットになるべく日夜の訓練に励む。そのための養成学校が、この機甲学校だ。

かつてファンタジーでしかなかった人型兵器は、今や宇宙最強とすら目されているのだ。若い少女少女たちであるのなら、ある意味、憧れても当然なのかもしれない。

しかし、ただの憧れだけで、歩き続けることは出来ない。夢を叶えたところで、所詮、それは殺人のための兵器ではない。夢を追う彼らは、人殺しのための技術を、その牙を、ただ磨き続けてきただけだったと気づくときが、必ず来る。

……それでもなお続けるとすれば。それは、彼らがなぜパイロットを目指したのか、という理由だ。機甲学校に入るほどの厳しい訓練と試練を通過した少女少女たちの、その原動力。

ただ。それが自分にあるのか、と聞かれれば、それは微妙なところだった。

「……そうだな。それが必要だから、かな」

必要だったから学んだ。必要だったから見につけた。言われてみれば、ずっとそんな人生だ。

「そういうアンジーは？ どうして機甲学校に？」

んー……と頬に手を当てたアンジーは、少し悩むようにして、言った。

「ライトニング、って知ってる？」

ぴくり、と齋の眉が動いた。

ライトニング。あるいは、シリウス・ワン。

「……知ってる。むしろ、パイロットを目指していて、知らない人の方が少ないんじゃないか？」

かのG・U軍^{アメリカ}の持つ、最強のエースパイロット『シリウス』。

そして、シリウスの駆る機体の名こそ、かの『ライトニング』だ。

憧れる人間は、少なくない。彼女もきつとその一人なのだろう。

それ以上を聞き出すことは出来なかった。なぜなら

「お、さっきの二年じゃないか」

背後から声に、唐突に呼びとめられて、齋とアンジーは足を止めた。

振り返れば、そこには春寺、と呼ばれた軽薄な印象の先輩が立っていた。

ただその印象も、さっきの一事で大分修正しなくてはならないかもしれない。軽薄なだけではない、という風な感じで。

「……なぜか妙に罵られたような気が」

「いや、気のせいですよ先輩」

「そうです、気のせいです部長。罵りの一つや二つ、気にしては身が持ちませんよ」

と、齋の言葉の後に続いたのは、例のメイド服姿の女性だ。

前から思っていたが、なぜメイド服なのか。そしてなぜ片手に刀

を提げているのか。無論メイド服なので、服装から学年を類推することは出来ない。

女性は、おしとやか、という言葉がまさしく似合うであろう笑顔で続けた。

「不肖、この鹿堂聖、いつも部長のことを心で小馬鹿にしております故」

「ひどいつー!？」

「あ……相変わらずですね、お二人とも」

と、二人の漫才一（？）に口を挟んだのは、隣のアンジーだった。どうやら、この二人とは知り合いのようだ。

「おや、アンジーちゃんじゃない。お久しぶりー」

「お久しぶりです、アンジェリカ様」

「せ、先輩！ 後輩に様付けはやめてくださいって言ってるじゃないですか！」

あわてたように、メイド服の女性を止めにかかるアンジー。

しかしそれをすらりとかわし、まさに本物のメイドのごとく丁寧に腰を折る。

「しかしこの間、代案として用意させていただいた『アンちゃん』や『アン坊』といった愛称はお気に召さなかったようですし」

「普通に呼ぶって選択肢はないんですか!？」

思わず突っ込んだアンジーに、ふるふる、と首を振るわせるメイド服。

「そんな、恐れ多い！ アンジェリカ様を呼び捨てにするなんて……」

どうやら、呼び捨ては駄目でもアン坊はオーケーらしい。

なんとなくしにその状況を見守っていた齋に、春寺が「ああそうだ」と思い出したように言った。

「そういや、自己紹介もまだだったな。俺は生徒会執行部部长、春

寺嵩だ。んで……」

春寺が示すと、未だアンジーと戯れていたメイド服の先輩が、こちらを振り向いて一礼した。

「私は生徒会執行部副部長、鹿堂聖と申します。よろしくお願いいたします」

「生徒会執行部……ですか？」

どうやら生徒会とはまた違う組織らしい。耳慣れない言葉に、思わず齋も聞き返す。

「ああ……転校生じゃちょっと分からんか。えーと、まあ簡単に言えば……聖」

と、傍らに立っていたメイド服の少女に声をかけると、はい、と小さく頭を下げ、少女が説明を開始した。

「生徒会は、三つの組織に分かれています。中心組織である生徒自治委員会と、生徒会役員の任免権限を持つ二つの組織。この二つの組織が、生徒会執行部と生徒会調停部です」

なるほど、と思う。

生徒による自治を尊重するがゆえ、生徒会に与えられる権限が絶大なものであるうことは、容易に想像がつく。

だが絶大なだけでは暴走するがゆえに、対立する三局によって運営する、ということか。

要するに三権分立の考え方だ。この学校独自のものなのだろう。

「つつても俺らは端役だからね。大して人材も集まらない割りに、面倒な仕事を押し付けられもする。要約するに、絶賛役員募集中、なんだけど……」

と、春寺はアンジーの方に視線を向ける。しかしアンジーは、少し顔をしかめて首を振った。

「すいません、先輩。私に、そのような重役は向いていませんので……」

「うーん、残念。アンジーちゃんなら申し分ないんだけどなー可愛
いし。唯一、俺と聖の意見が合った人材なだけどなー」

薄ら笑いと共に言った春寺に、冷たい視線を寄越すメイドこと聖
「意見が合わないのは、いつもいつもいつも顔で選んでるからじゃ
ないですかね駄目部長」

「そーそー、だから顔も能力も完璧なアンジーちゃんがいいなー僕
は」

懲りた様子もなく肩を竦める春寺に、聖はため息を落とす。

と、「そうだ」と何からひらめいたのか、両手を打ち合わせた春
寺は、齋へと振り返った。

「じゃあさ、齋くんはどうか、執行部。齋君が入ってくれちゃっ
たりしたら、アンジーちゃんも入ってくれないかなー？ なんて」

「……そちらが本音だろう、貴様。相変わらずの狡さだな、シユウ」
と、この声は、春寺の背後からだった。

うおっ、と春寺が飛び退る。アンジーも、聖もまた、驚いたよう
に眼を見開いていた。

それもそうだろう。先ほどまでまるで気配がなかった。ここまで
近寄るのに、この場にいた誰もが気づかなかったのだ。

例の無口な、齋をして刀のようなと評した男性だった。相変わ
らず、まるで切れそうな気配を纏いながら、齋へと視線を向けてく
る。

「って、タツかよ。ビビらせんな、つたく」

「油断している方が悪い」

タツと呼ばれた少年は、あっさりとそう断じ、齋の前へと進み出
た。

そのまま、じっと齋の目を覗き込んでくる。後ろで春寺が「男同
士見詰め合っても気持ち悪いだけ」なんて騒いでいたが、それを気
にする様子もない。

「……気づかれていたか」

「何がです？」

謎の呟きに返せる言葉も当然なく。素っ頓狂な返事をする齋に、ふっと彼は微笑んだ。

「……ふん。なるほど、面白い男だ」

「はあ……」

彼は、そのまま握手を求めるように片手を伸ばしてきた。

「……俺は東郷龍平。生徒会調停部部长を務めている。好きに呼んでくれて構わん」

「はい、よろしくお願いします、東郷先輩」

男同士握手を交わす。と、横合いから、春寺が声を上げた。

「ところでタツ、今日はゆーりんどうしたの？」

ゆーりん、とは誰のことだろう、と齋が思っていると、隣にいたアンジーが「調停部の副部长」と耳打ちしてきた。

「……上谷なら、もう帰ったはずだが」

「もう帰ったのか……相変わらずパワフルだなあ、あの娘」

「……ああ。今日の集会についても、話を聞いていたか微妙なところだ」

「あー、まあ、あの子は細かい話、頭に入らないからねえ」

あっはっは、と朗らかに馬鹿判定された上谷何がし氏であった。

そういえば、一言も口を挟まず、ぼうつと虚空を見ていた女性がいたよ。うな……い。な。か。つ。た。よ。う。な。

「恐らく悠里様は、夕食について思いを馳せていたのではないでしょうが」

メイド服姿の聖が、優雅な仕草で人差し指を立ててそう告げた。なるほど、それで大体の人物像はつかめたような気がする……。

「……そもそもにして、だ。彼は既に、執行部入りの申し出を断っているはずだが？」

「いや、こいつが断つたのは風紀委員会行きで、執行部行きは断つてないもんねー」

どこからどう考えても子供の理屈であるのだが、臆面もなく断言されると、あっさりと断りづらくなってしまう。「なあ？」なんて話題を振られると尚更だ。

「……まったく。四方院に眼をつけられたいかなければやめておけ。それ以上は、奴が出張りかねんぞ」

「うげ……。会長ちゃんは、怒るとマジで怖えからな……」

若干顔を青くした春寺は、降参、という感じで両手を上に挙げた。

ふと、東郷は二、三步前へと進むと、肩越しに斎を振り返り、告げた。

「……調停部に入りたければ、いつでも俺に言え。お前なら、いつでも歓迎してやる……」

そうとだけ告げると、もう振り返ることもなく、まっすぐに去って行った。

ひゅう、と春寺が口笛を吹く。

「珍しいこともあるもんだねえ。へえ……」

「珍しい、ですか？」

問い返すと、春寺はふっと微笑み……斎の背中を、ぱんっ、と全力で叩いた。

「お前には期待してるってことだよ、ルーキー！」

第四話 生徒会（後書き）

なんだかぶったぎりな感じでごめんなさい。とりあえず第一幕、ということで。次幕では、ようやくロボットことアーマード・アサルトが出てきます。

HPではTIIPSクリックシステム（単語をクリックすると説明が出る）というのをやっています。現在、41個ほど作っていますので、気になる方はそちらもどうぞ。ただ、まったく読んでなくても分かるように頑張りたいと思っています。

10/31 今更ながら、風紀委員会の設定を変更したのを忘れていたので修正しました。

第五話 紅

アーマード、というものがある。

その言葉は現代宇宙において多く用いられるものであるが、定義としては簡単なものだ。

重力圏内外を問わず、継続的な航行、及び大気圏突入が可能な装置。しかし、その範囲はあまりにも広範に過ぎる。よってそれらは用途別に、三種に大別された。

すなわち、アサルト軍用、モータービル輸送用、クラフト工業用である。

この中でも軍用は、さらに人型、ドラグーン空母型、タクティクス航空型に分類されるわけだが……閑話休題。

キャプテン・チエンバースは苛立っていた。

キャプテンといっても、彼の船はあくまでもアーマード・モーター、輸送用の小型船でしかない。それも旧式だ。

TNF-337 タイラント。

開発されたのは今から四十年以上も前で、購入したのは二十年以上も昔の話だ。しかし未だに必要なパフォーマンスを発揮するし、正直、これだけ乗り続けていれば愛着もわく。

彼が苛立っているのは、別に船が旧式だからではない。今回の仕事について、だった。

(……荷物の中身は話せねえし、覗くのも許さねえだと？ くそっ、舐めやがって……)

運び屋は信頼が命だ。

今から何十年も前に、自分を運び屋として育て上げた父親が吐いた言葉だ。信頼を築けば、信頼できる仕事先から仕事が来る。それをこなしていけばいいだけなのだ。

かつては反発した。それでは食っていけないと反論した。個人業

の運び屋は、いつも食い詰めるか食い詰めないかのギリギリのラインで仕事をしているのだ。燃料費だって馬鹿にならない。

ただ、それから何十年も経った今になって　今更、その言葉の重さが身に沁みていた。

（ああそうさ、金に釣られちまった俺が馬鹿だったんだ！　クソッ……）

今でも、我が愛船の格納庫には、正体不明の荷物と、仕事先が無理やり押し付けてきた護衛とやらが乗っている。

ただ、分かってもいた。奴らは監視なのだ。もし自分が荷物の中身を覗こうとしたとき、真っ先に撃ち殺すための。

ちっ、ともう一度舌打ちし、周辺の宙域を探查するレーダーを凝視した。

実のところ、一番怖いのは宙域警察なのだ。もし職質を掛けられて、荷を改めでもされたら、とぞっとする。

用途によって分けられる、アサルトやモバイルといった三種。

あくまでも大別する理由が用途であるので、たとえ純粋な輸送機として開発されたとしても、軍用に使われれば、それはアーマード・アサルトという区別になる。たとえ武装のひとつも積んでいなかったとしても、だ。

だから、たとえば。

今自分が積んでいるコンテナの中身が、武装したアーマード・アサルトであったなら。憎たらしいことに、この船はアーマード・アサルトという分類になってしまっわけだ。

無論、アーマード・アサルトに搭乗するには、特別な免許がいる。それだけではなく、中央政府による運用許可証も必要だ。それがなければ、良くて免許剥奪……悪くて数十年単位での禁固刑。

もちろん、乗せた側もただで済むはずがない。だがそれでもなお、

国に黙って兵器類をどこかに輸送しようという輩はいるものだ。かつてそういったことに巻き込まれ、何の罪もないのに投獄された人間を、自分は少なからず見てきている。

当時は、自分には絶対にありえないと思っていたが、今となっては笑えないジョークだ。

ただひたすら警察機が現れないように内心で祈りつつ……不意にレーダーが立てた、ピッ、という小さな電子音に、彼は席から飛び上がった。

まずい、やばい、どうする、なんで　と思考が高速で回転しながら、どうしようもない言葉ばかりを紡いだ。

一通り混乱し、床に転んでのた打ち回る。ごんっ、と頭を勢いよくぶつけてから……待て、と、チェンバースは動きを止め、眼を閉じた。

冷静に考えれば。あれがもし警察の機体で、こちらを目標にしているなら、まず最初に警告があるのではないか？

起き上がり、もう一度レーダーを覗き込む。そこには確かに、機体の存在を示す赤い光点が写っていた。レーダーを指で叩き、詳細を出す。

(……識別信号を出してない?)

少なくとも、こちらには届いていない、ということになっている。だがそれはおかしい。レーダーが届く範囲なら、間違いなく識別信号も届くはずだ。

そうこう考えているうちに、機体は刻々とこちらへと近づいていく。

だが識別信号はなく、こちらへの呼びかけもない……となれば。

(まさか……海賊か?)

ぞくり、と嫌な冷気が背中を撫でた。

出会ってはいけない連中。海賊。あるいは界賊とも呼ばれる。この広い宇宙において、通りがかる商船を襲い、金品を強奪し、そして乗組員を殺す。そういった、いわゆるすべてを奪っていく類の連中だ。

その存在が許されるはずもない類の連中だったが、何せ宇宙は広い。その根絶も発見も至難の業だ。

だが、と、チエンバースは思い返した。

(そうだ。こういうときのために、奴らがいるんじゃないか！)

通信チャンネルを格納庫に合わせ、チエンバースは二度深呼吸をして……通信スイッチを押した。

「俺だ、チエンバースだ。……海賊が出た。あんたらの出番だ」

『あ？ なんだって？』

「だから、海賊だ！ 奴らが出たんだよ！ さつさとやってくれ。

これがあんたらの仕事だろう！」

まったくもって。でなければ、こんなクソ共を、俺の愛船の格納庫に入れておいてやる理由なんてまるでない。

『オーケーオーケー、分かったよ、どなるなって』

『ハハハハ、言ってやんなよマーク。おっさん、ビビってるだけだつて』

『オーウ、こりゃ失敬』

回線の向こうで、がはははは、と笑う声が聞こえる。くそつ、と向こうに聞こえないように舌打ちしてから、レーダーを手で操作する。

「今から位置情報を送る。あんたらは今すぐ出てくれ」

『オーケー。ま、タダ働きの面白くねエしな』

『よっしゃ、おっさん！ ボーナスイ弾んでくれよ！』

「……分かった。それは帰ってきてから話そう」

チエンバースの言葉にひとしきり連中が笑うとほぼ同時、位置情

報の転送が完了した。

ちくしょう。海賊なんぞ現れなけりや、あんなクソどもに笑われずに済んだのに。ひとしきり心の中で悪態をついていると、内線の向こうから声が聞こえてきた。

『全員、準備完了したぜ。おら、ハッチ上げてくれ！』

「了解。幸運を祈るよ」

苦虫を噛み潰し、心の片隅にも存在しないセリフを吐いてから、チェンバースはハッチの開閉ボタンを押した。

三機のドラグーンがハッチから降下し、スラスターを始動させた。距離をとっていなければ、その熱量でモービルが溶けてしまう。

だが荒くれの傭兵である男たちにとって、そんなことは些事ではなかった。

一気に加速し、目標との距離を詰める。

『いやー、クソつまんねえ仕事になると思ったんだが、ラッキーだったな』

「まったくだ。ストレス発散に、思いつきりやるか」

などと言い合いつつも、レーダーに機影が映る。ふとその機影に、思わず眉をしかめた。

(ドラグーン、一機だけだあ?)

どういっつもりなのか。確かにただのモービルならば、ドラグーン一機で十分に叩き殺せるだろう。だが……

(運がなかったなあ、ド素人)

にやり、と笑みを浮かべる。そして彼は、眼前にあるドラグーンを蹴り殺しにすることに決めた。

自らの機体、L4 ハルベルド は、デイビットアームズテクノロジ社製の第二世代ドラグーンだ。それが三機。これなら、たと

え第三世代であろうと捻り潰せる。

そう思いつつも、さらに機体を加速させる。音速を優に突破した三機は、あっという間に彼我の距離を詰め、目標を視認距離にまで収めた。目標は動かない。

さらに距離を積み　そして、射程圏内へ。

「もらったア!!!」

減速。照準。一連の動作によってドラグーンの手が動き、保持していたアサルトライフルが、中央の敵を照準し、火を吹いて　。

……そして、その瞬間。

紅い、風が疾った。

閃光。そして、爆音。

耳元で起こったかのごとく大音響を撒き散らしたそれは、同時に衝撃波で自分の機体を吹き飛ばした。思わず手を伸ばして自動姿勢制御プログラムを起動。

(なんだっ!?!　何が起こった……!?!)

回転していく視界の中、どうにか状況を把握しようと眼を凝らす。その間にも、自動制御プログラムによって機体の姿勢が回復していく。

……と。ようやく、眼についたもの。

それは　残骸、だった。

原型は保っていない。手も足も腰も、そうであったであろう部品が散らばっていた。どう見ても、重量の半分以上が見当たらない。恐らく先の爆発で飛ばされたのだろう。

そして、それに混じるように。もはや原型などまるでとどめていない、黒焦げた肉と血と。

「な……んだ、と……?」

原型などまるで留めていなくとも、それが何なのかを彼は瞬時に理解した。それは、いましがた自分の隣で突撃していた、三機のうちの一機だ。

……つまるところ。先ほどの爆発は、こいつが？

ではなぜ？ 自分で爆発するなどありえない。自爆機能など存在しないはずだ。ではどうして？

はっとした。

そうだ。自分たちは今、戦っていたはずなのだ。身の程知らずの紅いドラグーンを八つ裂きにしようとする……。

(……紅い、ドラグーン、だと?)

びっくり、とした。直感にも等しいそれに、背筋が冷えていく。赤いドラグーン。聞いたことがある。知っている。まずい、やばい、それは、だめだ。

『う……ぐあああああああ!!!!』

無線の向こうで、絶叫が聞こえた。

必死に音源を探す。見つけた。ここからまだ向こう。紅い機体と、自分たちの仲間の一機。

「おい……おい！ やめろ、そいつは……っ!!」

必死に、無線に叩きつけるように言葉を放つ。

しかし、その言葉が届く事も、ましてや彼がそれを理解することもありえなかった。

なぜなら、瞬きほどの間もなく接近した紅い機体が、手にもった何かを、至近距離でそいつに発射したのだから。

再びの轟音。そして爆発。

(一撃……だと?)

信じられない思いで呟く。たった一撃……たった一撃で、撃沈。

ありえない話ではない。もともと、ドラグーン的设计思想からして、装甲は薄いのだ。機関部に至近距離から弾丸を叩き込めば、一

撃で終わらせることも可能だ。

だが、しかし。

(…………あの、速度で、か?)

背筋を、いやな汗が伝った。

馬鹿馬鹿しいほどの速度だった。馬鹿馬鹿しいほどの初速、馬鹿馬鹿しいほどの加速だった。眼で追うだけで必死だ。あんな動きをする化け物なんて、見たことも聞いたこともない。

あれほどの加速度であれば、とんでもないGが掛かっているはずで…………しかし紅い機体は、まるでそれを気に留めた様子もない。

「おまえは…………」

いつしか 胸の中にあつた恐れが、確信へと代わっていた。

紅い機体がこちらを向く。抵抗する気力も起きなかった。奴が加速姿勢に入る。恐らく、次の瞬間に自分は死んでいる。

「スカーレット 深紅の…………ダイバー 流星…………」

男の口がその名前を刻んだ瞬間、

彼は、宇宙の藻屑と消えた。

第六話 授業開始

始業式から、一日。その日、登校した斎を待っていたのは、視線だった。

好奇、羨望、あるいは嫉妬。そんなところだろうか。感情の渦にも似た視線に突き刺されながら、校門から教室まで歩いていく。

どうという経緯なのかは分からないが、どうやら先日の件は既に知られているらしかった。

憂鬱な気分のまま、胸ポケットの学生証をスリットに通し、校舎へと入る。第二学年の校舎は二階なので、近場の階段へと足を向けた。

「おはよっ、イツキ」

階段の一段目を上ろうとしたとき、背後から声がかかった。ぱたぱたと駆けてくる音。

「おはよう、アンジー」

振り向きながら答える。案の定そこにいた紅い髪の少女は、にっこりと微笑みながら、斎の隣に並んだ。

「昨日は大変だったね……」

「ああ。……随分と濃い一日だった気がする」
それは偽らざる本音だった。

始業式の日には、喧嘩というにはやや物騒な事態に介入し、さらには生徒会室に呼ばれ、恐らくこの学校での重役たちなのであるが生徒たちと邂逅した。

まったくもって、濃い一日だった。良いか悪いかはともかくとして。

「でも、凄いいじゃない、イツキ。あの東郷先輩に認めてもらうなんて」

「……そんなに有名な人なのか？」

「もちろん。総合成績で三位。対人戦闘だと右に出る人は……まあ、細峯先輩ぐらいかな」

へえ、と頷く。確かに、ものすごく雰囲気のある人物だった。なんとというか、雰囲気だけで斬れそうな感じで。

(あれは軍人、っていうより武士、って感じだけだな)

只者ではない、という意味では同じであるかもしれない。雰囲気だけでいえば、彼は学生の域を遥かに超えていた。

ただ、それで言うのならば。

「細峯先輩って、そんなに凄いのか……」

「対人格闘成績ならほぼ互角で、総合成績なら、細峯先輩のほうが少し上みたいだね」

確かに、強いだろう、というのは感じていた。だが、よもやこの学院でのトップだとは。

「なら、俺の手出しは、完全に無駄だったっていうことが……」

「そ、そんなことないと思うけど」

溜め息を吐く。アンジーの慰めも、事実を歪めてくれるわけではない。どちらにせよ、自分が勝手に暴れ、勝手に目立ってしまった、というただそれだけの間抜けな結果なわけだ。

(細峯先輩、と言えば)

悪いことをしてしまった、と思う。

あの時、自分の中で、誘いを断る以外の選択肢はなかった。とはいえ、彼女がわざわざ自分を推薦し、生徒会長にまで直談判してくれたのも確かなわけで。

結局昨日は、帰るときにも姿を見なかった。ひよっとしたら怒らせたかもしれない。あるいは、シヨックのひとつも受けてしまったかもしれない……が。

(俺が心配しても、どうしようもない、か)

誘いを断った身なのだ。自分がああだこうだと言ったところで、何にもならない。

などと云々と迷っていると、気がつけば教室の扉の前だった。

斎のクラスは六組だ。第二学年第六組。無論、いったいどういうクラスで、どういった人間がいるのかは、まだよく分からないわけだが。

ドアのパネルに手をかざす。そのまま手を横に滑らせると、それと連動して、ドアも横へとスライドした。

中へ入る　と。

「よっ、おはよーさん、有名人！」

ばんっ、と不意打ちで背を叩かれ、若干つんのめりながら、振り返った。

気づけばいつの間にか、そこには自分よりもやや高い背の、黒髪の少年が立っていた。人好きのする笑みを浮かべて、こちらを見下ろしている。

「有名人、って……」

「そりゃー、有名人だからな。九桐斎っしょ、九桐斎」

「ああ、まあ、そうだけど」

答えると、にかっとなんげと笑って、再びバンバンとこちらの背を叩いてきた。

「聞いたぜ。昨日、あの生徒会長に呼び出されたんだろ？ 始業式サボるわで、速攻問題児かと思ったら、なんでもお咎めなしらしいし？ いやーもーわけわからんて感じで有名人」

高速でまくし立てられた拳句、「ま、入りな」などと教室に押し込まれてしまう。

途端。早めに登校していた生徒から浴びせられる目線。さらには。「おい皆あ、有名人が来たぜー！」

背後からの声にちらちらがじろじろへと変わる。まだ幸運だった

のが、早朝ゆえか人影がまだまばらであったことか。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよっと、コウ！ 何やってんのよー！」

「あ？ 何、ってそりゃ……どっからどう見ても自己紹介？」

「どう見ても吊るし上げでしかないわよ！ この馬鹿！」

後ろから追いかけて来たアンジーが、コウから齋を引き離すように割り込む。ようやくアンジーの顔を認めたらしい少年が、おお、と両手を打ち合わせた。

「誰かと思えば委員長かよ！ ……っーことは、アレか？ まさか一緒に登校……」

「ち、ちちち違つわよ馬鹿！ 偶然階段で一緒になっただけ！ あと委員長はまだ決まってるじゃない！」

「がーとまくし立てるアンジーに、コウは、ニヤニヤしつつ顎を撫でた。

「いやあ、委員長の焦った顔なんて、俺初めて見るなあ。なるほど……」

「なるほどじゃない！」

叫ぶアンジーのことなど何のその、だ。先ほどに増す勢いでバシバシと背中を連打されうえに、がっしりとヘッドロックを極められ、齋は眉間を寄せた。割と真剣に痛い。ついでに言えば、なぜか感じる視線の一部に殺気を感じたりもする。

「いいから離しなさいって、もう！」

気づかないうちに何か人生を間違えたのか、齋が真剣に悩んでいると、アンジーがコウから齋を引き離れた。ヘッドロックからようやくと逃れられた齋は、ようやくと振り返り、男を見た。

背の高い男である。比較的整っている顔立ちなのだろうが、笑いがそれをどこか三枚目に見せていた。つんつんの黒い髪と、ブラウンの瞳。典型的な日本人に見える。

「冷たいなあおい。こんなもん、仲の良い同級生のスキンシップじ

「やね？」

「仲の良いって……あのね、今知り合ったばかりでしょ？」

「あ、バレた？」

「てへ、と笑うと、悪戯げな笑みのまま、少年は齋へと振り返った。

「そんなわけで、今日から同じクラスっつーことで、よろしくな」

「ああ、ええと……」

「おっと、忘れてた。自己紹介もまだだっけか」

「ははつと笑って、改めて、とこちらへと手を伸ばした。

「俺は黒瀬晃一郎。呼び方はコウちゃん、とか、コウちゃん、とかで」

「ああ。九桐齋だ。よろしく、コウちゃん」

「素直に言われたとおり言ってるよ、一瞬目を白黒させて、そして物凄く嫌な顔になった。」

「冗談に決まってるんだろーが。マジで呼ぶな！ うう、気持ち悪い

……」

「おい……じゃあ何て呼べばいいんだ？」

「コウでいいよ、コウで」

「分かったよ、と頷く齋。伸ばされた手を握り、がっしりと握手する。」

「っしや、これで俺らはマブダチだぜ有名人！ よろしくな」

手を握ってぶんぶんと振ると、にかつと笑った。

『有名人』という響きにもものすごく憂鬱になりつつ、答える。

「ああ、よろしく……あとマブダチついでに、有名人はやめてくれ」

「そうか？ ……まあいいや。じゃ、なんて呼んだらいい？」

「齋は「普通でいい」と答え、手を離れた。少年は「そか」と答えると、近くの椅子にどっかかりと腰を下ろした。そこは齋の席のひとつ横だ。」

「……隣の席だったのか？」

「おーよ、昨日からだぜ？ ま、ずっと暗い顔してたしなあ」

などと言いつつ、めいめいの席へと座る。アンジーの席は随分と前だ。机にカバンを置くと、一瞬こちらを振り返ろうとして　　後の女生徒に話しかけられ、そちらを向いた。見るに黒髪を三つ編みにした、おっとりとした雰囲気の和風少女である。

時たまこちらを指差されつつ、それを眺めて齋に、コウが再度のヘッドロック。そして、そのまま囁きかけてくる。

「……委員長と話してんのは、各務雪奈な。うちのナンバー2」
「ナンバー2？　成績のか？」

「馬鹿、人気度に決まってるんだろ！　うちのクラスはレベル高えんだぜ？」

などといわれても、さしたる興味もない齋にとっては、さして嬉しいわけでもない。

今の最重要命題としては、とにかく派手な動きをせず、このクラスに溶け込むことだろう。どうすればいいかは見当もつかないが……そんなわけで。

「ちょ、いいから離せって……」

「ばっかお前、いいか？　俺が今から、事の重要さってやつをーから説明してやるから……」

「必要ないから離せって……！」
と、悪戦苦闘すること暫く。

「あー、えー……そのじゃれあつ男子生徒二名？　ホームルーム始まるんだけどねえ」

いつの間にチャイムを聞き逃していたのか。

教師とクラスメイトから送られる、生暖かいんだか苦笑気味だかの視線を浴びて、ようやくコウは腕を離した。

一時限目を機甲理論、二時限目を英語学習にと終えた斎は、コネクターから生徒手帳を引き抜き、電源を落とした。

あれからアンジーに教えてもらったのだが、この生徒手帳は認証のためだけのものではなく、立体映像で資料や教科書も表示できるうえ、実際に手帳として使うことすらも出来る。ただ、総じて性能は低いし、本格的に勉強するには向いていない。ゆえに斎は、タブレットPCに生徒手帳をコネクターに繋ぎ、そちらで教科書を表示するという方法を取っていた。

同じことをしている生徒は割と多く、逆に言えば、本気で勉強に打ち込もうと思っていない、所謂体育会系の生徒は生徒手帳だけでそれを済ませていた。

かつてあった紙の教科書は姿を消し、現在では、教材は全て電子図書、黒板に見えるそれもホログラフィー機器だ。

今の時代、本物の紙に触れたことのある人間はほとんどない。それもそうだろう。紙の原材料である本物の木は、今では植林コロニーぐらいでしか見かけることはない。町に配置されている植木や樹木は、精巧に再現されただけの模造品だ。模造品といっても、擬似的な光合成さえ起こすシロモノで、見ただけ触っただけでは判別もつかないが。

「よおおおおおっしやああ、来たぜええええ！　おい、来たぜええ九桐！」

と、体育会系代表ことコウが唐突に横で奇声をあげる。ため息。この男は休み時間のたびに、あーでもないこーでもないあーだこーだと話しかけてくるので、いい加減面倒だったりもする。

ただ、前回までのそれとは違い、どうやら今並々ならぬ興奮があるらしく、仕方もなく問い返す。

「……来た？　何がだ？」

「あ？　決まってるでしょ！　次の授業だよ！」

ふむ、と顎に手を当てる。見ている限り、一時限目、二時限目と

もにあーっー呻いていたので、てっきり勉強は嫌いだと思っていたのだが。

「次の授業か……ふむ。アンジー、次の授業は何だったかな？」

「え？ ああ……確か、三年の見学だったと」

「ま、まてまてまてまてまてい！」

と、焦ったように声を上げたコウは、間に割り込んで、交互に二人の顔を見やった。

「あ、アンジーって……今、アンジーって呼んだ？」

「え？ ああ……そうだけど」

おおっ、というクラスからのどよめき。ずがぁんっ、と雷に打たれたような表情を浮かべたコウは、二歩、三歩とよろめき、机に両手で突っ伏した。

「なんでだ……前にそう呼んだ時、俺半殺しにされたのに……」

「なんで、といわれても……」

困ったように頬を掻く。と、横合いから、ふふっ、という小さな笑い声が聞こえた。

「確かに、男子にそう呼ばれると怒るよね、アンジー」

声の方を振り向く。と、それはどうやら見た顔のようだった。黒髪を三つ編みにした、おっとり、という形容詞が最も似合うであろう少女。先ほどアンジーと話していた……名前は確か。

「各務雪奈さん、だったかな？」

「はい。よろしく願います、九桐くん」

柔和な微笑みとともに、一礼する女性。長く黒い髪の似合う、和風美人といった女性だ。彼女に名前が知られているのは、もしかすればアンジーが話したのかもしれない。

こちらの表情から心を読み取ったのか、それは分からないが、小さくふふっと笑って、ちらりとアンジーへと視線を向けた。

「よくアンジーから、話は聞いてますよ。なんでも、は」

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと！ それ言っちゃ駄目だってば！」
抱きつくように羽交い絞めされ、口元を押さえられる雪奈。もがもがーもごもごーとじゃれあう様に暴れる二人を無視して、齋はコウに視線を向けた。

「で、三年の見学？ それがどうしだんだ？」

コウは暫く二人のじゃれあいを啞然としてみていたが、齋に気づき、若干あわてたように肩を竦めた。

「あー……いや、ただの見学じゃねえよ。三年の人たちが、ドラグーンに乗ってるところ見られるらしい。そのうえ、実際のドラグーンも近くで見学できるらしいぜ」

「へえ」

いくら機甲学校とはいえ、実際に所有しているドラグーンはそう多くはないだろう。格納庫の規模からして、恐らくだが四十機か五十機程度。

多いほうだが、一クラスが二十人程度であることを考えれば、決して足りているわけではない。ましてや去年一年間は、トレーニングばかりでシミュレーターすらも触れなかったのだと事前に聞いている。そういう意味で、二年生にとって、人型兵器ドラグーンというそれはまだ遠くにあるものなのだろう。

「なるほど、それでか……っと」

「あいてっ！」

どんっ、と何かに後ろからぶつかられ、少しだけよろめく。

後ろを振り向けば、小柄な少年が、背中から自分にぶつかっただけ、床に転んでいるのが見えた。さらにその後方から、やや呆れ気味な、しかしぼうつとしている印象の少年が近づいてくる。

「……蒼、ちゃんと前見て歩かないから」

手を刺し伸ばした無表情な少年が、小柄な少年の手を引っ張って起き上がらせる。小柄な少年は、ぱんぱんと服から埃を払うと、こ

ちらへと振り向いてきた。

「ごめんなさい。大丈夫？」

小柄な少年は、頭を下げて、伺うような眼でこちらを見る。

愛嬌のある少年だ、と思った。リボンを見る限り同学年だが、同年代とはとも思えない。まるで小動物が何かを思い起こさせるような、そんな少年だった。

「ああ、大丈夫。そっちこそ怪我はないか？」

「うん、大丈夫！　ありがとう！」

勢いよく頷いた少年の頭に、ぽん、と手が乗る。見れば、それは先ほどの無表情な少年だった。

「僕からも……謝る。ごめんなさい」

ぼそぼそという小さな声だが、確かにそう言って、少年は頭を下げた。

見れば、やや中性的な顔立ちをしている。それに何よりもまず、眼が眠そうなのが特徴的だ。実際に眠いかどうかは分からないが……ともあれ、美少年の部類に入るだろう。

「蒼……早く行かないと……」

「あ、そうだった！　ごめんねお兄ちゃん！　僕たちもう行かないや！」

どこに、と尋ねる間もなく、駆け出そうとする少年二人。そのとき、はつとコウが何かをひらめいたように顔を上げた。

「あー！　蒼、隼人、お前ら、先に行って席を取っとく気がよ！？」

「当然じゃん、コウ兄！　じゃ、僕らはお先に！」

駆け出した少年二人の背中に、ちっ、とコウは舌打ちし、齋のほうへと振り返る。

「くおー、負けられるか！　齋、全力ダッシュだ！　ついて来い！」

「？　ああ、分かった」

「行くぞ！」

だんっ、と両足を踏みしめ、コウとともに一気に加速。追いつくべく、彼らは疾走を始めた……その背後で。

「あっ、ちよっと！ 待ってよ、もう……雪奈、走るよ！」

「うん、分かった！」

と、少女二人も、その背を追って疾走する。

第七話 機体見学

機甲学校は、その名の通り、アーマード乗りを養成するための学校である。

それゆえ、巨大な面性を誇る格納庫が学内の敷地に四つ設置されており、さらにその向こうには演習場が設置されている。この演習場は非常に広大で、山あり谷あり砂漠あり、という、十数キロ四方にも及ぶものだ。さらに宇宙にまで演習場があるのだから、その巨大さたるや筆舌に尽くしがたい。

ここまで広大な敷地を用意できるのは、機甲学校用のコロニーとして月面で新たに設計された、この『アストライア』だからこそだろう。その巨大さの割に、三十万人程度しか人が住んでいないのも、まあ頷ける話だ。

などと、第一格納庫の前で思いを馳せながら、斎はその演習場を眺めていた。

眼前いっぱいにまで広がる広大な平原、その向こうに見える小高い山。まるで地球の自然をそのまま再現したかのような雄大さに、思わず見とれていた。

「はあ、ぜえ……ぜえ……ば、バケモンかよ……おまえ……」

背後で地面に突っ伏して、荒い息を吐く男に斎は振り向いた。コウだ。

さらにその後ろには、小柄な少年と、追いかけてきた少女二人が突っ伏している。

「同、感……ね。はあ、ふう……イツキ……どうしてあれだけ走って、息も切らさないの……？」

同じように息を切らせながら、続いたのはアンジーだ。

問われた側の斎は肩を竦め、同じく平気な顔で立っているもう一人、変わらずぼうつとした表情のままの少年に視線を投げる。

「毎日……走ってたらず、これぐらい……出来る……」
なお会話に合間が多いのは、別に息を切らしているわけではなく、ただ少年本来の故だ。

ところどころ雑草の生える地面に寝転がり「あー、くそー」と呻くコウ。どうやらしばらく動けそうにないらしい。

だがそれでも仕方がないと言えた。なぜなら、2 kmほどの距離を、ほぼ全力疾走のデッドヒートで駆け抜けたのだ。

幸いにも、全力で走ったからだろう、休み時間はまだ多く時間を残していた。ちなみに、この学校は敷地が物凄く広いため、移動時間を考慮してか休み時間も多めに用意してある。

周囲には生徒の姿もないが、静かとは言えなかった。格納庫の中からは人の声やら、工具の音やらが聞こえてくる。

これは恐らく、工学科の生徒が機体の最終メンテナンスを行っているのだろう。

工学科、というのは、自分たちのような機甲科……つまり、パイロット養成科と対を成す、この学校の整備員養成科である。

聞いたところによると、学校で使うドラグーンも、工学科の三年生が整備を行っているらしい。

ふと興味を引かれ、閉じられたままの格納庫の扉まで近寄っていくと。

がちやり、と不意に内側から灰色のドアが開き、中から女性が姿を見せた。

黒色の作業服を着た女性だ。ややけだるそうな眼で、口にはタバコをくわえている。

髪もボサボサで顔も煤だらけだが、それでも服の下からはつきりと強調している体つきが、彼女の性別を明確に御主張していた。

若干驚く斎と目線が合うと、「お？」と声を上げ、つかつかと近

寄ってきた。

「あー、あれかな？ 次の授業で三年を見学するっつー人ら？」

「ああ……ええ、はい。そうです」

「ほーん、なるへそ。こんなに早く来るとはねえ。偉い偉い」

まあそれは成り行き上、とも答えられず、うんうんとひとしきり頷いて、女性は言った。

「でもあれだ。まだメンテ終わってないんだよねえ。あ、良かったら見てく？」

「いや……」

迷惑でしょうから、と斎が断りかけて……唐突に、後ろから首をつかまれてのけぞった。

振り向けば、斎の首を掴んでいる男は、自分の背よりも一回り大きい。思い当たる人間は一人しかなかった……コウだ。

「是非！」

若干血走った眼でコウがそう言うと、「そう？」と女性は言っ
て、「じゃあ、ちょっと待ってて」と扉の向こうに引っ込んだ。

「……メンテ中はちょっと邪魔だと思っただが？」

「ばっか、お前え、まさかまさかのメンテを見られるチャンスだぜ！？ 逃す手があるか！」

がすっ、とどこにそんな力が残っていたのか分からない力で蹴りを入れられ、斎はため息を吐いた。

気がつけば、いつの間にか起き上がっていたアンジーも、似たような好奇心を目に浮かべている。後ろにいる小柄な少年も同じだ。表情には、まだ疲労が残って見える。その疲労を押しても見たいのだろう。まったく……と斎は首を振り、再度のため息。

「分かった。ただし……騒がない、暴れない、手を触れない。これを必ず守ること。いいな」

斎の言葉に、全員が頷いた。

まだ立てないらしく、席を取っておく、と言った雪奈と、それに付き添うと告げた隼人に後を任せ、斎、アンジー、コウ、そして小柄な少年の四人は、灰色のドアをくぐった。

格納庫の中は、喧騒に包まれていた。

バチバチッ、とある場所では火花が散り、またある場所ではキーボードを叩き続け、またある場所では、モニターと睨み合いを続ける数人の生徒たち。

喧騒であった。生徒が走ってあちらこちらに移動し、そのたびにカンカンと金属製の足場が音を立てている。

「悪いねー、あとちよっとなんだけど、終わってなくてサ」

「あとちよっと？」

「三十分くらいかな？」

三十分。あからさまに休み時間をオーバーしていた。恐らく、演習のギリギリまでメンテナンスは続くのだろう。

「こっちこっち」

案内されるまま、高台のほうへと歩いていく斎たち。

「ほら、そこ見てみ」

言われるがまま、高台の手すりに身を預けるように乗り出す。

「う、お……おおおお……」

コウがうめき声のようなものを上げる。

だが、分からないでもなかった。誰もが息をのむ光景が、確かにそこにはあったのだから。

壮観であった。

十機にも及ぶドラグーンが、膝を折って整列している。そしてその周囲では、紺色のツナギを着た作業員たちがせわしなく動いている。恐らくだが、全員が三年だろう。

圧巻であった。コウだけではなく、全員がその光景に息を呑んでいる。

それは仕方がないかもしれない。

いくら機甲学校の生徒とはいえ、身近でドラグーンを見た機会はほとんどないはずだ。あるいは、初めてなのかもしれない。

「んー、やつぱもうちょいかかりそうだなあ」

と、同じ高台から身を乗り出して、火のついていないタバコを口で弄びながら、面倒くさそうに言った。

「正面の機体…… K K D 1、ですか」

「お、詳しいね、キミ」

齋が告げると、女生徒がなにやら好奇心の満ちた目でにやにや笑いを浮かべる。

「特徴的なフォルムですから。加茂富の機体は」

「んー、まあそうだけどねえ」

紫色のカラーリングと鋭角な顔つき。そしてその対極のように曲線を描く躯のフォルム。

見間違えようもなく、加茂富技研の傑作機と謳われる K K D 1 《紫電》である。

「……あー、確かに。言われてみりゃ、ありや紫電……か？」

「うーん、まあ、言われてみればそう見える気もするけど……」

「でもなんか……違う気がするよ？ あれ？」

コウとアンジー、そして小柄な少年の三人は、どうやら納得できていないらしく、何度か首を捻っている。はは、と小さく笑って、ツナギ姿の女性は手を振った。

「分からんでもしやあないよ。大分弄くってるからね」

「弄ってる……ってことは……」

「そ。あれはカスタム機ってわけ」

コウの問いに返された答えに、おおー、とほぼ全員が声を上げた。カスタム機、というのは、A D O S と呼ばれるドラグーン専用の OS のほかに、武装接続や機体パーツ、電子系統などをオリジナルでカスタマイズしている機体のことだ。

カスタマイズ如何によって、特性が加わったり機体性能が上下したりするわけで、整備士の腕の見せ所、というわけだ。

しかしカスタム機はその性質上、そのカスタマイズを企図した本人しか操縦できない。

他人が変えてしまった機体を自在に操るのは至難の業だ。スラスタアの制御位置ですら変わっていたりもするのだから、まさに死活問題である。

つまり、専用機。未だドラグーンにさえ乗せてもらえない二年生からすれば、専用機を持っている人間というのは憧れの的だ。なんでも

「専用機を持てるのは、三年でも上位成績者の十人だけなんだよ」

と、齋に囁くように付け足したのはアンジー。なるほど、と齋は頷いた。

「で、これは誰の」

「あーちよつと待てよ。確か聞いたことあるんだけど……紫電を使う上位十人^{トップマイスター}って言や……確かええと」

「忍!」

コウがああだこうだと悩んでいる間に、名前を呼ばれて後ろを振り向いたツナギ姿の女性は、ふっと小さく笑った。

「噂をすれば本人のご登場だ」

「ん? なんだ……あ」

驚いたような女性の声に、斎も振り返る。と、そこに立っていたのは

「……細峯先輩！」

アンジーが驚いたように声を上げ、こちらを見て唾然としている女性の名前を呼んだ。

細峯結莉。昨日会ったばかりの、風紀委員長だ。もともと、その顛末は相当に刺激的であり、お互いに深い印象を刻んでしまってもいたわけだが。

以前の制服姿とは違い、既に漆黒のパイロットスーツ姿だ。スレンダーな体に張り付くようなスーツの上から、紺色のパーカーを着込んでいる。

「……細峯先輩。先日は、どうも」

「あ、ああ……」

金縛りのように唾然としていた二人だが、斎はある程度滑らかに、結莉は未だ固さが残る面持ちで頷いた。

「……と、いうことは……」

「紫電のパイロットっていうのは……」

コウと小柄な少年の声を引き継ぐように、ツナギ姿の女性……先ほど忍と呼ばれた少女は頷いた。

「そゆこと。正鳳学院第二位、細峯結莉さ。その二人は知り合いかい？」

問われた斎とアンジーは小さく頷き、忍は小さく笑って頷くと結莉の下まで歩み寄った。

「で？ どしたん？」

「あ、ああ……マークマーカ―だが、これをお願いしようと思って」

マークマーカ―、と言えば、精密照準調整値のことだろう、と斎は思い出す。

言ってしまったえば、どれほど精密に、どれほどの距離の対象を照準するのかの調整値だ。

高ければ高いほど、高速駆動は捕らえづらくなり、また自分が激しい機動をしている時の照準が処理しきれない。しかし低すぎれば、先に照準されてしまうというハンデを背負うことになる。一般には、遠距離戦術タイプは値を高めに、近距離戦術タイプは低めに設定する。

結莉が手に持っていた薄型のタブレット端末を差し出すと、少しばかりそれを覗き込んだ忍は「オーケー」と答えてそれを受け取った。

「あー、見学は好きにしていいでー。ごゆっくりー」

背後越しにそう告げると、忍はさっさと階段を下りて行ってしまった。

取り残された側となった斎たちは、再度結莉に視線を送る。目が合うと同時に、斎は頭を下げた。

「昨日はすみませんでした、先輩。ご厚意を無碍にしまして」

「ああ……いや。私の方こそ、少しばかり強引に事を進めてしまったと反省している。すまなかつた」

お互いに謝り、頭を下げる。

謝られるようなことでもなかつたが、正直、少しほっとした。その声にはただ純粋な申し訳なさがあつたゆえに。

斎としては、落胆なり失望なり、あるいは怒りなりを抱かれないたかもしれないと思っていた。

実際、彼女が自分を風紀委員会に入れようとするために、少なからぬ労力を払ったであろうことは事実だったのだから。

しかし顔を上げた彼女の表情は、幾分か和らいでいた。

もしかすれば彼女もまた、同じようなことで悩んでいたのかもしれない。

「で、機体の見学か？　そういえば、次の演習は二年が見学すると聞いているが……」

「あ、はい！　それ俺らです！」

コウが緊張した声で叫ぶと、そちらへと視線を向けた結莉がふつと笑った。

「そうか。私もやるのがなくなったからな。少し付き合おうか」

「い、いいんスカ!？」

「……細峯先輩、大丈夫なんですか？」

コウが声を裏返し、齋が静かに問うと、結莉は鷹揚に頷いた。

「ああ。あとは機体のメンテナンスを待つだけさ。私が出るのは

……そうだな、忍の腕を信じてやることぐらいだ」

「忍……っていうと、さっきの人ですよね？」

「ああ。工学科第三学年、雪宮忍だ。腕は確かだぞ？」

齋が問うと、結莉が頷いて答えた。「えっ」と背後で全員が驚く。

「先輩だったのか……てつきり先生かと……」

「っていうか、タバコくわえてませんでしたっけ？」

コウと小柄な少年とが続いて疑問を口にする。

実のところまったく同じ事を思っていた齋も頷き、結莉へと視線を送る。目が合うと、彼女は小さく苦笑して肩を竦めた。

「一応、あれはただの禁煙パイプらしい。まあ細かいことは考えてやるな」

結莉たちと再び高台から機体を見下ろしたコウたちは、ああだこうだと、結莉から機体のカスタムについてを聞き出していた。

「……まあ、フルカスタムも考えてはいるんだ。卒業までには設計を纏めておきたいが……」

「フルカスタム！」

コウが飛び上がるようにして言った。

フルカスタムというのは、機体にアタッチメントをつけてカスタマイズするのではなく、機体構造そのものをカスタマイズするというものだ。

どの程度かによるが、エンジンバイパスやスラストシステムまでを換装し、さらにそれに合った機体強度の設計やA D O S、あるいは骨格や機体基盤を除く全般を換装したものを、一般にはそう呼ぶ。

そしてその段階にまで至ったものは、まったく別個の機体として認識され、新たな認識名……つまり機体コードを名乗ることさえも可能である。

有名なものでいえば、かのシリウスが駆る　ライトニング　もそうだ。とはいえ

「まあ、フルカスタムまで許されるほどの予算が出るのは、入隊して相当先の話だろうがな」

学生ならば学校の用意した機材を自由に使うことが出来るだろうが、軍隊ではそうもいかない。

一個人の機体に投入される予算というのは、当然、昇格するほどに高くなっていくのが一般的だ。新人の、いつ壊れるとも分からない機体に、ああだこうだと予算を投入するのもナンセンスな話だろう。

学校を卒業すれば、彼女の機体も学校へと返却されることになる。それゆえに重要なのは、どの程度カスタマイズ思想を固め、設計書を完成させるかということだ。言ってしまうえば、脛をかじれるだけかじっておき将来に役立てようと言う、ある種当然の発想である。

「設計は、どの程度まで終わってるんです？」

齋が問うと、ふむ、と腕組みをして、眼前の紫の機体を見下ろしながら言った。

「四割、といったところかな。去年の十二月から始めたから、まあ

まあといった具合か」

「へえ……凄いなあ」

結莉の言葉に、眼を輝かせながら呟いたのはアンジーだ。

確か彼女は「ライトニングに憧れて入学した」と言っていた。恐らく、フルカスタム機についても並々ならぬ憧れや思い入れがあるのだろう。

眼下では、作業員が武装の取り付けにかかっていた。

巨大なアームに吊り下げられた、ゆうに五メートルを超す長大な刀のようなものが、機体の背面に取り付けられていく。

「戦術大太刀……あのサイズだと、霧雨ツスか？」

コウの言葉に、「ああ」と結莉が頷く。

戦術大太刀というのは、いわゆる一振動増幅型刀剣類（MVS）の一種だ。

その構造理論を応用し、日本古来より伝わっていた『刀』の技術を復活させ完成させた、その結果である。日本のみならず、諸外国でも搭載される平澤重工の傑作だ。

「……本当なら鬼斬級が欲しいんだが、さすがにあの機体では扱えなくてな。まあ、フルカスタマイズまでのお預けだ」

鬼斬、というのは、全長七メートルを超える二段展開式の戦術大太刀だ。平澤重工の開発した戦術大太刀の中でも、もっとも非常識極まらない代物である。

その大質量故に、十分に扱うには相応の出力と機体重量、さらにはそれを接近戦で発揮しうるだけの高い機動性能がなくてはならない。

ふと斎の隣で、それまで下の作業を覗いていたアンジーは、思いつくように言った。

「先輩の機体は、クロス・チューニング近距離戦術想定機なんですね。となると、副武装

は……」

「一短機関銃（SMG）のアダムス・ヴァレスタと、大型拳銃のバツクギア？、つてところね。結莉の機体って、相変わらず趣味全開だから」

ふと、背後から口を挟む声に、齋を含む全員が振り帰った。そこには、昨日見た顔が、音を立てて階段を登って来るところだった。

「会長」

「こんにちわ、齋君」

につこりとほほ笑んだ女性は、昨日に会った生徒会長、四方院楓だ。

二人の声に、ようやく新たな登場人物を見つけたのか、背後から「うわっ、わっ、生徒会長……！」やら「マジか……スゲエ！」やらの呟きが聞こえてきた。

後半の「スゲエ」は、恐らくだが彼女の服装に端を発するものだろう。

結莉と同じく、黒のパイロットスーツにオレンジ色のパーカーというものだが、体つきが随分と違う。

女性らしい胸のふくらみやら、蠱惑的な体のラインやらが、ぴつたりと張り付くパイロットスーツで強調されてしまっていた。

「……………」

……ふと。その反応に気づいてしまったらしい結莉（Bカップ）は、こめかみにやや青筋を立てつつも、齋の足を踏みつけた。

何故踏まれたのかさっぱり分からない齋としては、誰しも悩みはあるのだろう、と自らの中で整理をつけ、小さくため息を吐いた。

当の張本人たる生徒会長は、特別視線を気に留めた様子もなく高台上に上り、齋の眼前に立つとおもむろにこう言った。

「昨日は悪かったわね、齋くん。なんだか随分、長い間引きとめちやっつ」

「いえ、気にしてませんよ」

齋が言うと、楓は「そう?」と言ってにやりと笑うなり、ぼんぼん、と齋の肩を叩いた。

「まあ何にせよ、仲直りできたみたいで良かったわ。ユイ、相当気にしてみたいだし」

楓の言葉に、ごほん、と齋の横合いから溜め息がひとつ。結莉だ。

「……楓。それで、何の用なんだ? もうそっちの調整は終わったのか?」

「もちろん。私は一番手みたいだしね」

笑って肩を竦める楓。それは恐らく、この後の訓練のことを指しているのだろう。

(……?)

ふと楓の顔色に、影が差したような気がして齋は首を傾げた。

……どこか、ドラグーンに乗るのを嫌がっているような……。しかし一瞬後には、その影も綺麗さっぱりと消えてしまっていた。周囲の誰かが気づいた風もない。やはり気のせいだったのだろうか、と齋がさらに首を傾げていると、楓と齋の視線が交差した。すると、にこりと楓は笑って、齋たちの方に歩み寄って来る。

「見学かしら? まあ、分からないでもないけど。私も初めて生でドラグーンを見たとき、結構はしゃいじやったし」

「何を懐かしそうに言ってるんだ。去年の話だろう?」

遠い目をして笑う楓に、結莉がくすりと笑って応じた。

「もう、去年なんて言ったら、とっくに昔の話じゃない」
茶化さないでよ、と頬を膨らませる楓。

そんな二人を見つめていた齋に、「そういえば」と楓が思いついたようにこちらを向き直った。

「そういえばさ、齋くん。前ってどんな学校に通ってたの?」

「ほう、それは気になるな」

「……同感ですね」

楓の言葉に同調したのは結莉、そしてアンジーだ。他にもコウや、さらに小柄な少年なども何事かと近寄って来る。

む、と斎は少し困った顔をした。

「なんで急にそんな話に……というか、俺の経歴なんて、面白くもなんともないと思いますが」

「それは聞いてから決めるわ。さ、さ」

斎の言葉に、楓はにやにやししながらも近寄り、促してくる。

さて困った……と、視線を彷徨わせ、ある一点に固定する。

その向こうでは、いつ現れたのか 両手を組んだ姿勢のまま、無言で壁に背を預けていた男性が、ふっと笑った。どうやら助けるつもりは皆無らしい。

はあ、と溜め息をひとつ。

「……分かりました。何が聞きたいんです？」

降参のポーズを示すと、してやったりと楓が笑った。斎は「生徒会長権限で調べられるだろうに」と胸中で呟きながら、肩をすくめる。

「前はどんな学校に通っていたんだ？」

「紀伊コロニーの機甲学校です。美丈峰というところですが」

結莉からの質問に、斎は誤魔化すこともなく率直に答えた。

そこに嘘は無いと判断したのか、ふうん、と楓は頷き、「じゃあ」と質問を変えた。

「結莉が言ってた格闘術って、そこで身につけたのかしら？」

「……いえ。家に道場がありました」

「実家に？ それって紀伊の？」

ええ、と答えると、楓は興味深そうににやりと笑うと、さらに斎に接近した。

「ねえねえもしかして、九桐くんって、あの」

「……無駄話はそのままでにしておけ」

唐突な背後の声に、びくっ、と楓は飛び上がったって反応した。

全員が背後を振りかえる。誰も気づかなかつたのだろう、いつの間に出現していたのか、東郷龍平が壁に背を預けて、斎たちに視線を送っていた。

両腕を組んだまま片眼を開け、そのまま続ける。

「……そろそろ休み時間も終わる頃合いだ。急いだ方がいいだろう。四方院も、そろそろ機体を運び出す時間だと思っが」

その言葉に「あっ」と呟いたのは、腕時計に視線を落とした小柄な少年だった。

「ホントだよ、コウ！ そろそろ行かないと遅れちゃう！」

「げ……」

懐から生徒手帳を取り出すと、そのままディスプレイを覗きこんで唸るコウ。

確かに、次の授業まで、もう五分を切っている。

「すみません、先輩方。そろそろいかないと」

「で、でもよう」

斎が頭を下げると、背後で未練たらしげにコウが呻いた。

ふっつと結莉が笑うと、小さく手を振って答える。

「早く行け。見学する機会も、またあるさ」

はい、と斎が再度答え、未練がましくちらちらとハンガーを見下ろすコウの背中をバン、と叩く。

隣のアンジーも、「ありがとうございました」と一礼し、駆けだす。最後にコウが振り返って、「ぜ、ぜひまたお願いします！」などと叫んでから、一行は出口へと走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680x/>

バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

2011年12月11日17時53分発行